

石川県内における水産資源の動向 (令和7年3月)

石川県水産総合センター

本書の利用にあたって

1 発行のねらい

改正漁業法においては、国や県による公的規制と漁業者の自主的取組との組合せにより資源管理を推進することとされています。石川県においては、従来より資源管理計画等に基づく漁業者の自主的な資源管理が行われてきましたが、令和6年度以降は改正漁業法に基づく資源管理協定により自主的管理を進めていくこととなっています。

本書は、県の資源管理方針や資源管理協定における資源管理目標の設定、資源管理協定に基づく自主的取組の評価・検証及び高度化の際の参考とすることを目的に作成されたものです。

2 本書の読み方

本書の各部の内容は次のとおりです。

魚種名・系群(対象海域)
魚種名、資源評価の対象となる系群または海域、石川県での主な漁法、漁期を記載しています。

生態
資源評価・資源管理の参考となる生態情報(分布・回遊、産卵期・産卵場、成長・成熟)を記載しています。

資源動向
国立研究開発法人水産研究・教育機構による資源評価の内容を記載しています。

18. サワラ

日本海・東シナ海系群

主な漁法と漁期
定置網：9～12月

地方名：サワラ、サゴシ、ヤナギサワラ

生態(1)

分布・回遊
分布は、東シナ海から黄海、渤海、北海道以南の日本海に及ぶ。日本海に分布するサワラは、0～1歳の時期に日本海に留まり、その分布を日本海北部にまで拡大するが、2歳の時に南下して産卵場である東シナ海まで回遊すると考えられる。

産卵期・産卵場
産卵期は、日本海、東シナ海系群では3～6月頃とされる。産卵場は、福建省沿岸(3～4月)、黄海沿岸(5月中旬～6月中旬)、および渤海湾から遼東湾(5月下旬～6月上旬)である。日本海における産卵活動の有無は不明。

成長・成熟
雌雄ともに1歳魚の一部が成熟を開始し、2歳魚以上では大部分が成熟する。成長には雌雄差があり、2歳以上において雌は雄に比べ成長が速い。日本海沿岸で漁獲されたサワラの耳石を用いた年齢査定結果と月別尾叉長組成のモード(頻度)追跡から判断すると、満1歳で尾叉長40cm台ないし50cm台、満2歳で60cm台ないし70cm台に成長すると見なされる。寿命は、6歳程度と推定される。

県内では、50cm以下のものはサゴシ、50～70cmのものはヤナギ、70cm以上のものをサワラと呼ばれている。

県内動向

漁獲動向
主に定置網で漁獲されている。産卵期(3～6月)を過ぎたあたりから入網し始め、7～12月に多く漁獲される。漁獲量は、2000年ごろから漁獲が始まり2007年まで上昇傾向が続き、そこから2012年まで減少したものの、2016年にピークを迎えるまで再び上昇し、その後減少傾向となっている。県内主要港における2022年の漁獲量は660.7トンで前年を下回った。

来遊動向
県内の定置網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2000年代半ばから上昇傾向にあったが、2016年をピークに以後減少または横ばいとなっている。2000年以降のCPUEの動向によると、2022年の来遊水準は低位である。

トピック
県内一部地域では、マカジキ(カジキ類)のことをサワラと呼ぶため、区別するためにヤナギサワラとも呼ばれている。

出典：(1) 令和4(2022)年度サワラの資源評価 2023 国立研究開発法人水産研究・教育機構

トピック
魚種や県内の漁業に関して特異な話題があった場合に記載しています。

県内動向

漁獲動向
県内での漁獲の状況(地区、漁法、漁期、漁獲量の推移)を記載しています。

資源動向
県内での漁業のCPUE(努力量当たりの漁獲量)の推移から資源量の動向を推定しています。全期間のCPUEの最大値と最小値の間を三等分して上から高位、中位、低位とし、直近年の資源水準を評価しました。

資源水準の評価方法

1. アカアマダイ

主な漁法と漁期

刺網：4～12月



地方名：クジダイ，アマ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

本種は青森県以南の日本沿岸、東シナ海、黄海、南シナ海などに広く分布する。日本周辺では、日本海西部海域から東シナ海にかけて、陸棚上～陸棚縁辺域の水深80～130mの海域が主分布域である。一般的には成魚は大きな移動をしないとされているが、成長に伴う深度方向の移動や底質に応じた移動を行っている可能性がある。

産卵期・産卵場

日本海南西海域では、産卵期は6～10月で、水深100～130mの海域で産卵すると推定されている。

成長・成熟

雌に比べ雄の方が成長が早い。最小成熟全長は雄が244mm、雌が285mm、50%成熟全長は雄が313mm、雌が347mmとされる。寿命は雄で11歳、雌で9歳程度とされる。

年齢	雄全長(mm)	雌全長(mm)
1歳	153	149
3歳	280	261
5歳	362	318
7歳	416	347
9歳	452	361

資源動向(国による資源評価)

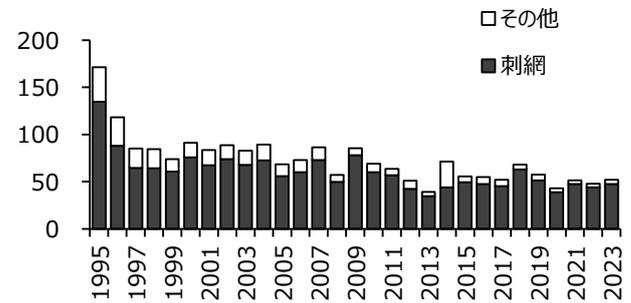
水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

漁獲動向

主に刺網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1996～1997年に大きく減少したが、その後は横ばいもしくは微減となっている。県内主要港における2023年の漁獲量は52トンで前年並みであった。

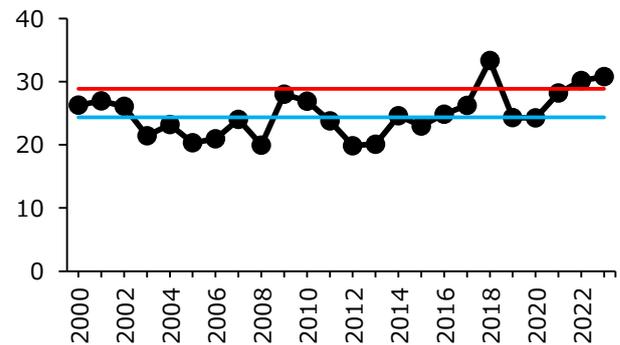
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の刺網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2000年以降、大きな増減は少なく安定して推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



2.アカカマス

主な漁法と漁期

定置網：9～11月



地方名：カマス

生態(1)

分布・回遊

北海道以南の南日本、東シナ海、南シナ海に分布し、沿岸の藻場に生息する。

産卵期・産卵場

産卵期は初夏で、瀬戸内海や相模湾では6～7月とされる。仔魚は南日本一帯の沿岸で観察される。

成長・成熟

生まれた年の年末には体長20cm前後に達する。その後、1歳で体長25cm、2歳で体長30cm前後になる。1歳になり体長20cmを超えると繁殖行動に参加する。

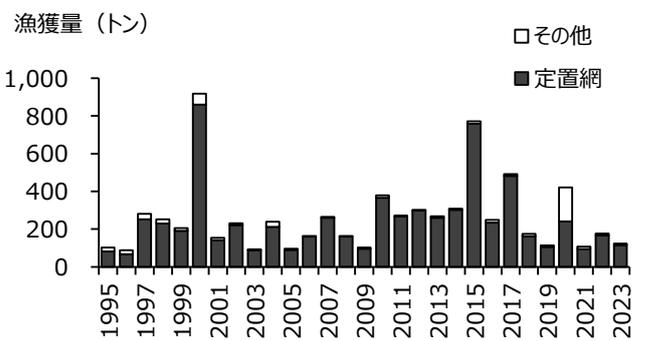
資源動向(国による資源評価)

水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

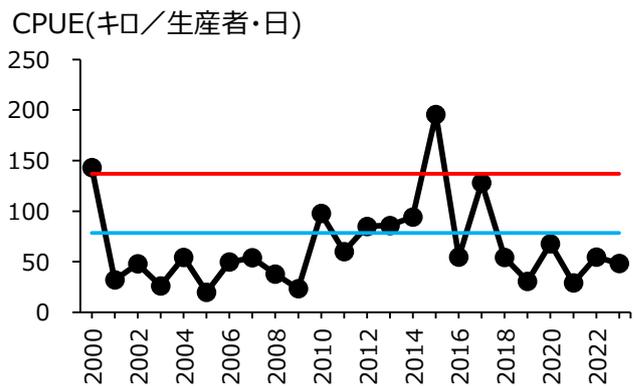
漁獲動向

主に定置網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、卓越した漁獲がときおり見られるものの、100～400トン程度で推移しており、2015年から2021年は減少傾向にある。県内主要港における2023年の漁獲量は124トンで前年を下回った。



来遊動向

県内の定置網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2001年から2009年まで概ね横ばいに推移し、2009年から2015年にかけて増加。2016年以降は増減を繰り返しながら減少傾向にある。2000年以降のCPUEの動向によると、2018年以降の来遊水準は低位である。



3.アカガレイ

日本海系群

主な漁法と漁期

底びき網：9～6月



地方名：アカガレイ

生態(1)

分布・回遊

日本海における本種は、隠岐東方、若狭湾および加賀沖を主分布域とし、本州沿岸全域に分布する。鉛直的には、水深150～900mに分布し、成魚は季節的に水平及び浅深移動を行う。成魚は2～4月に水深180～200mに産卵場を形成するため、晩秋より深場から産卵場となる水深帯への移動を開始し、産卵が終わると6月下旬頃より深場への移動を始める。

産卵期・産卵場

日本海西部（石川県以西）における産卵期は2～4月頃とされる。主産卵場は、若狭湾内、経ヶ岬周辺および赤碓沖を中心とする隠岐諸島周辺の海域であると考えられ、能登半島周辺の海域が未成魚の育成場所となっている。

成長・成熟

寿命は雄15歳、雌20歳と考えられており、雌のほうが大型になる。年齢別成熟率は、雄3歳・雌5歳で50%、10歳以上で雌雄ともに100%とされている。

	尾叉長(mm)	
	雄	雌
2歳	140	
5歳	200	
10歳	230	300

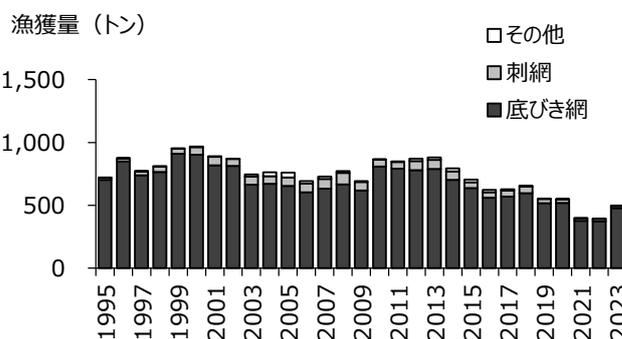
資源動向(国による資源評価)(1)

資源量は2000年以降緩やかに増加していたが、2016年以降はやや減少傾向となっており、2022年の資源量は45.3千トンであった。最大持続生産量(MSY)は6千トンで、これを実現する親魚量は23千トンと算定された。2022年の親魚量は33.8千トンでMSYを実現する水準を上回った。

県内動向

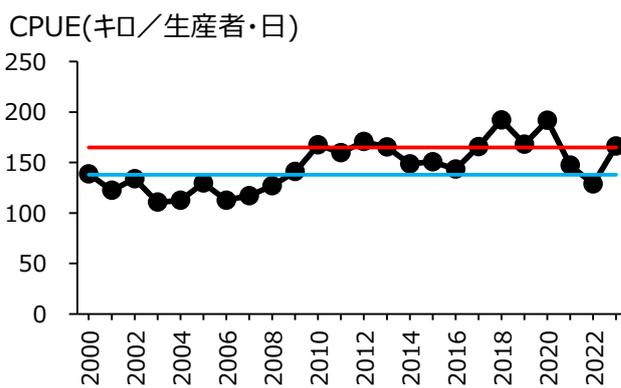
漁獲動向

漁獲の最盛期は2、3月であり、本県の春を代表する魚種のひとつである。主に底びき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、増減しつつも概ね横ばいで推移していたが、2013年以降は減少傾向となっている。県内主要港における2023年の漁獲量は496トンで前年を上回った。



来遊動向

県内主要港における底びき網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2000年以降大きな変動はなく、概ね横ばいに推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。



4.アカムツ

日本海系群

主な漁法と漁期

底びき網：6月，9～10月
刺網：5～9月



地方名：ノドグロ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

本県沿岸で漁獲される系群は、青森県日本海側から山口県にいたる水深200m以浅の大陸棚および陸棚斜面域に分布する。成長や季節に伴う分布域の変化が認められ、大型魚はより沖合の深場に生息し、季節的には夏季に浅い水深帯に移動する。

産卵期・産卵場

本種の卵形成は非同時発達型で、1産卵期に複数回産卵を行う。産卵期は、日本海南西海域では7～9月、新潟県沖では8～9月である。産卵場（水深）は不明である。

成長・成熟

寿命は雄では5歳、雌では10歳とされる。成熟開始年齢は、雄では3歳（全長15cm前後）、雌では3～4歳（全長20cm前後）である。

	全長(cm)	
	雄	雌
1歳	9	10
4歳	22	25
6歳		33
8歳		36
10歳		40

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

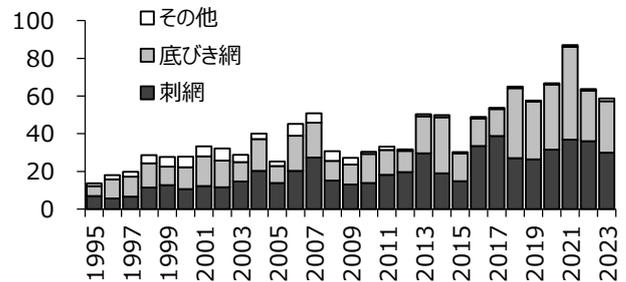
本系群の資源量指標値（2そうびき沖底の資源密度指数（kg/網））は1989年に過去最小値となった後、増減を繰り返しながら増加し、2011年以降は急増している。2020年度資源評価では、資源水準は高位、資源動向は横ばいとなった。

県内動向

漁獲動向

主に底びき網および刺網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、増減を繰り返しつつ横ばいもしくは増加傾向が続いていたが、2021年をピークに近年は減少傾向にある。県内主要港における2023年の漁獲量は59トンで前年を下回った。

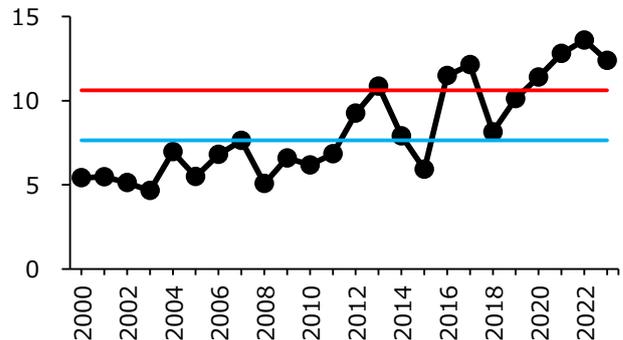
漁獲量 (トン)



来遊動向

県内主要港における刺網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2000年以降概ね横ばいで推移していたが、2019以降は高い水準となっている。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



5.アラ

日本海北・中部海域

主な漁法と漁期

釣り：6～10月
刺網：6～7月，9～10月



地方名：アラ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

北海道～九州南岸の太平洋沿岸、青森県～九州南岸の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海、東シナ海大陸棚縁辺～斜面域、朝鮮半島南岸、済州島、台湾、スル海に分布し、主に貝殻混じりの砂泥や岩礁域に生息する。

産卵期・産卵場

日本海北部における本種の産卵期・産卵場は不明。東シナ海では、仔魚の出現状況から8～9月頃、大陸棚縁辺での産卵が推察されている。

成長・成熟

本種の年齢・成長に関する知見は得られていない。東シナ海では約1mに達する個体が確認されている。

資源動向(国による資源評価)

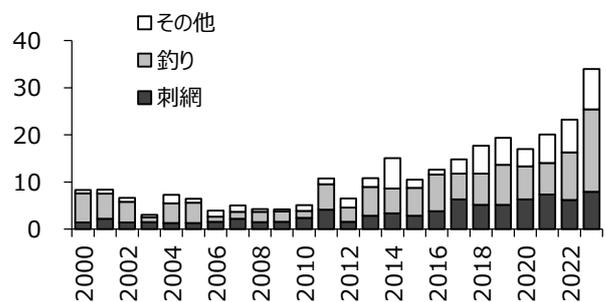
日本海北部で漁獲される本種の資源動向や資源水準を判断するための長期的な漁獲量や資源量指標は現時点では得られていない。

県内動向

漁獲動向

主に釣りおよび刺網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、2000年以降、概ね5トン程度で横ばいに推移していたが、2013年以降は増加傾向にある。県内主要港における2023年の漁獲量は2000年以降最高の34トンで前年を上回った。

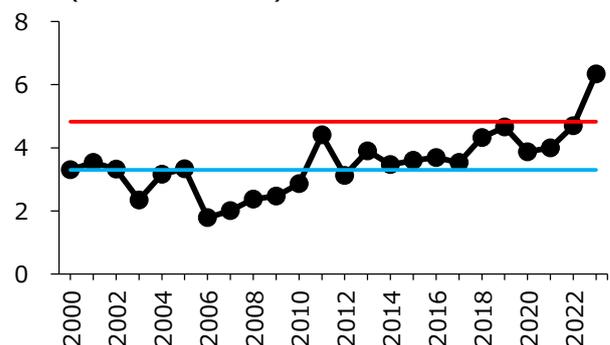
漁獲量(トン)



来遊動向

県内主要港における釣り漁業のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2006年に減少して以降緩やかに増加している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



6. イバラモエビ

主な漁法と漁期

エビカゴ：2～8月



地方名：オニエビ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

北極圏を中心に大西洋と太平洋の北部に分布し、日本海では北海道から山陰沖までの冷水域に分布する。水深200～300mの泥底に生息する。

産卵期・産卵場

太平洋のカナダ沖では、抱卵雌が出現するのは頭胸甲長は11.7mm以上、時期は11～2月と報告されている。

成長・成熟

抱卵雌の頭胸甲長は最大26.1mm、雄の頭胸甲長は最大32.0mmと報告されている。

資源動向(国による資源評価)

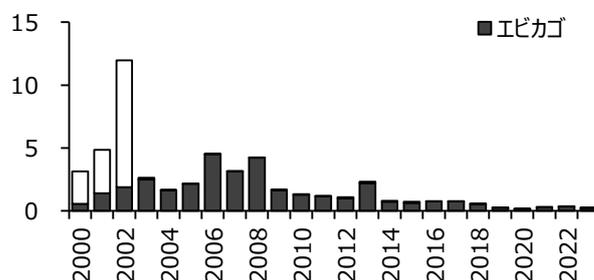
水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

漁獲動向

主に西海および輪島のエビカゴで漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、2000年以降、2002年までエビカゴ以外の漁法での漁獲が多かったが、その後の漁獲はほぼエビカゴで占められている。2000年以降のエビカゴでの漁獲量は、2006年まで増加傾向でその後は横ばいだったが、2009年以降は減少傾向となっており、近年は低調で推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は266キロで前年を下回った。

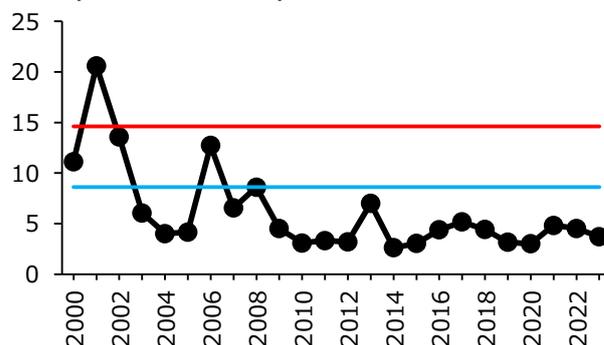
漁獲量(トン)



来遊動向

西海および輪島のエビカゴのCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2001年をピークに2004年まで急減し、その後は横ばいまたは微減で推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



トピック

県内では、モロトゲアカエビを狙ったエビカゴで混獲される。

7. ウスメバル

日本海北・中部系群

主な漁法と漁期

刺網：4～6月



地方名：ヤナギバチメ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

日本海側における本系群の分布は青森県から対馬海峡を経て釜山周辺の水深50～200mの岩礁域である。稚魚期に流れ藻に付随して移動回遊し、日本海側では着底までかなりの距離を北上すると考えられている。着底後は顕著な南下回遊が標識調査から報告されており、広域回遊資源であることが示唆されている。

産卵期・産卵場

日本海での産仔時期は2～5月で、西部で早く、北部で遅い傾向が見られる。

成長・成熟

雌雄による成長差は見られず、寿命は10歳程度である。本種は卵胎生魚であり、成熟年齢は4歳以降（3歳魚の一部を含む）とされる。

年齢	尾叉長 (cm)
1歳	8
2歳	13
4歳	21
6歳	25

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

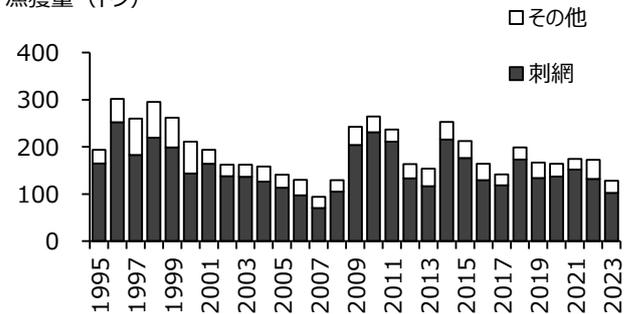
1995年以降の合計漁獲量の最高値と最低値を3等分した値について、それぞれ低位、中位、高位の境界値として、直近年の漁獲量から資源水準を判断した。2019年の資源水準は中位であり、直近5年間の推移から資源動向は増加と判断された。

県内動向

漁獲動向

主に刺網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1999年から2007年にかけて減少傾向だったが、2009年以降、増減はありつつ概ね横ばいで推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は128トンで過去15年で最低となった。

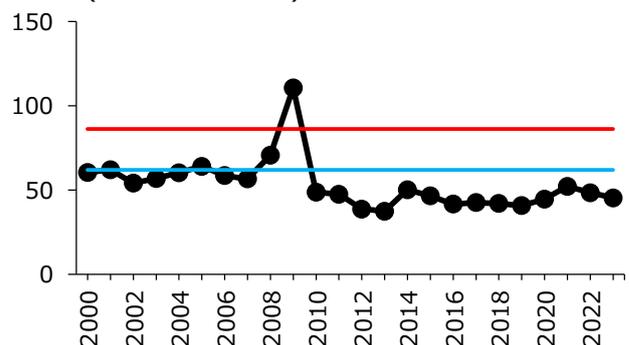
漁獲量 (トン)



来遊動向

県内の刺網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2009年の98kg・隻・日をのぞき35～60 kg・隻・日で推移している。2023年には45kg・隻・日であった。2000年以降のCPUEの動向によると、2010年以降、来遊水準は低位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



8. ウマヅラハギ

日本海・東シナ海系群

主な漁法と漁期

定置網：周年



地方名：バク、バクチ

生態(1)

分布・回遊

日本周辺および東シナ海、黄海に分布し、分布の主体は東シナ海である。

日本沿岸では季節的に移動しているとされ、成魚は夏季（5～7月）に産卵のため沿岸部に来遊し、11月頃からやや深場へ移動する。水平的な移動範囲はあまり広くないと考えられている。

産卵期・産卵場

日本周辺では、夏季（5～7月）に分布域の沿岸部で産卵しているとされる。東シナ海域では、4月頃に魚釣島付近で産卵しているとされる。

成長・成熟

本種は海域により成長が異なり、日本海沿岸の方が東シナ海より成長が速いとされる。新潟県沿岸においては、全長が1歳で約20cm、2歳で約24cmになり、20cm以上になると、雌は雄より全長に対する体重が重くなるとされる。最高年齢は10歳とされる。

新潟県沿岸では雌の最小成熟年齢は1歳という報告がある。東シナ海では雌は2歳から成熟個体が出現し、成熟率は3歳で53%、4歳以上で90～100%である。

資源動向(国による資源評価)(1)

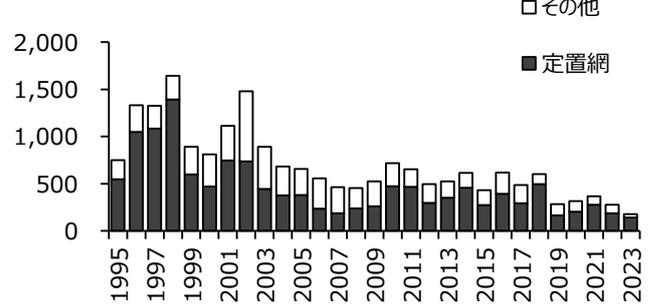
定置網漁業の漁獲データを用いた資源量指標値は、2014年に低下から上昇に転じ、2015～2017年はほぼ横ばいで推移したが、以降低下した。2019～2020年は概ね横ばいで推移し、2021年に微増したが、2022年は低下した。最近5年間（2018～2022年）は減少傾向にある。

県内動向

漁獲動向

主に定置網で漁獲されている。周年漁獲されるが、特に秋季から冬季にかけて漁獲量が多い。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、1998年、2002年にピークが見られたが、2003年以降は横ばいもしくは微減で推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は178トンで前年を下回った。

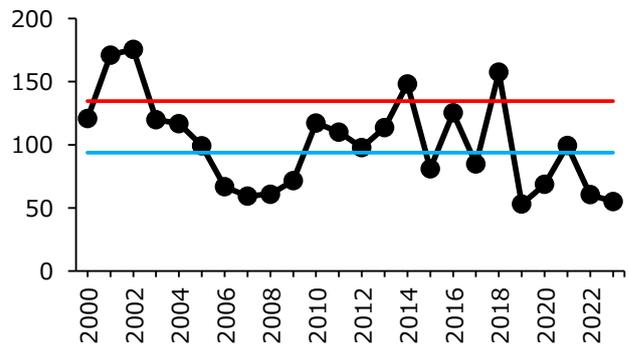
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の定置網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2004年以降、減少したが、2010年から増加に転じ、それ以降は増減を繰り返しつつおおむね横ばいで推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



9. カサゴ

主な漁法と漁期

刺網：3～6月



地方名：ドコ，ダルマ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

日本では、北海道から九州南岸の太平洋沿岸、北海道から九州南岸の日本海・東シナ海の沿岸、瀬戸内海、八丈島の岩礁域に生息する。生息域は潮間帯から水深80mくらいまでの岩礁域や藻場である。

産卵期・産卵場

本種は卵胎生で雄の成熟が進んだ秋以降に交尾し、雌の成熟が進んだ冬～春にかけて全長4mm程度の仔魚を産仔する。九州北部海域における成熟については、雄が早いもので8月から、雌は遅れて11月から成熟するとされている。

成長・成熟

耳石不透明帯の観察結果より、最高15本の輪紋が確認されたことから、本種の寿命は少なくとも15年はあると考えられる。成長は個体差、地域差が大きい。

資源動向(国による資源評価)

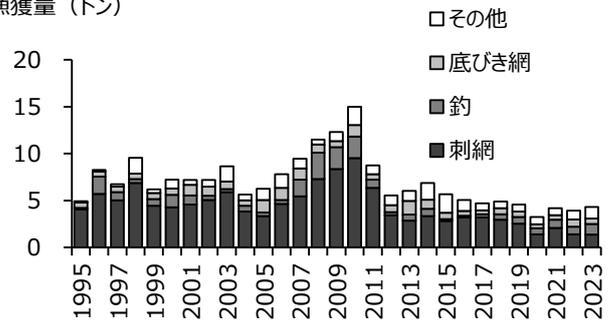
水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

漁獲動向

以前は主に刺網で漁獲されていたが、近年は釣りや底びき網の割合が増加している。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、2005年まで横ばいで、2004年から急増したが2010年をピークに急減し、2012年以降は横ばいで推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は4.3トンで前年並みであった。

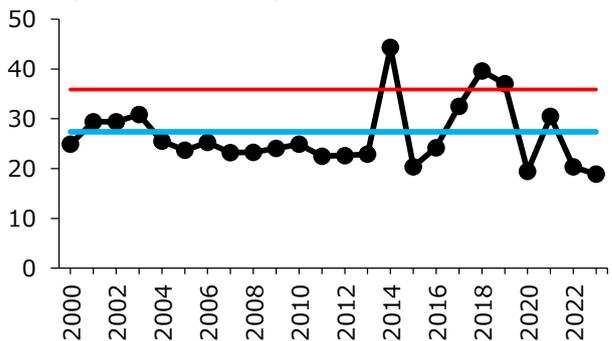
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の刺網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2013年まで安定して推移したが、2014年以降は大きく増減を繰り返している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



10. キジハタ

日本海域

主な漁法と漁期

刺網：5～9月



地方名：ナメラ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

青森県以南の日本各地、朝鮮半島南部、中国、台湾の岩礁域や護岸に分布する。ハタ類中最も美味しくある。

産卵期・産卵場

雌性先熟の雌雄同体であり、全長30cmになると雌から雄に性転換する。2歳魚では一部、3歳魚から多くの雌が産卵を始める。

成長・成熟

成長は6歳ごろまで急激で、7歳以降は緩やかになる。寿命は15歳程度である。

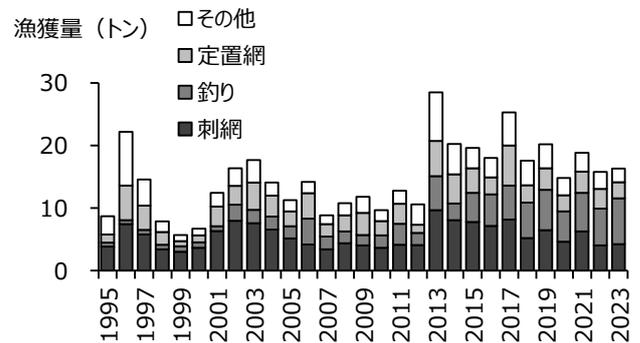
資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

本系群の資源量指標値は得られていない。京都府、兵庫県、鳥取県ならびに島根県における漁獲量の推移から、直近5年間の漁獲量は減少もしくは漸減傾向を示し、それらを合計した漁獲量も横ばいで推移した。

県内動向

漁獲動向

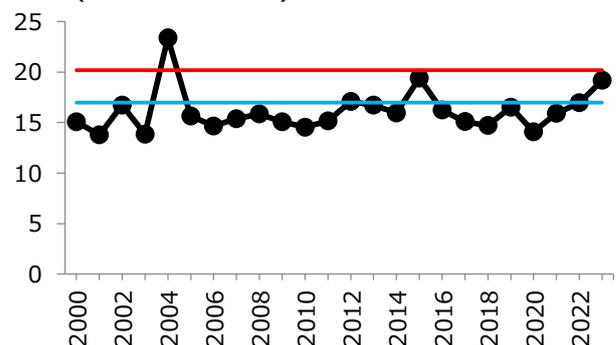
主に刺網、釣りおよび定置網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、10～15トン前後であったが、2013年以降は20トン前後で推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は16トンで前年並みであった。



来遊動向

県内の刺網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2004年を除き、15 kg/隻日前後で安定して推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は中位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



11. キダイ

主な漁法と漁期

底びき網：5～6月，9～10月
刺網：5～10月



地方名：メッキダイ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

本州中部以南・東シナ海・台湾・海南島の暖水域に分布する。大規模な回遊は知られておらず、夏期は浅場へ、冬期は深場へ深浅移動する程度である。

産卵期・産卵場

初回成熟年齢は2歳であり、3歳以上で全個体が成熟する。産卵期は春と秋の2回で、2つの発生群が認められる。産卵のための接岸、深浅移動は認められず、五島西沖～済州島、沖縄北西の大陸棚縁辺、台湾北東の大陸棚縁辺、浙江、福建近海で産卵すると考えられている。幼魚と親魚の分布域はほぼ重なる。

成長・成熟

成長は雌雄やふ化時期によって異なる。寿命は8歳以上である。

年齢	尾叉長(cm)
1歳	9～11
2歳	15～16
3歳	19～22
4歳	22～27

資源動向(国による資源評価)

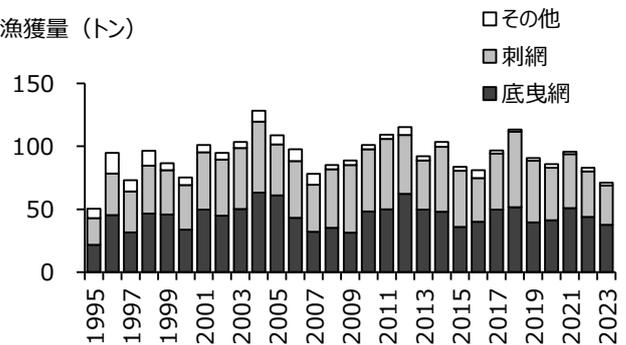
資源水準は中位、資源動向は増加と評価されている。

県内動向

漁獲動向

主に刺網と底びき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、増減はありつつも安定して漁獲されている。県内主要港における2023年の漁獲量は71トンで前年を下回った。

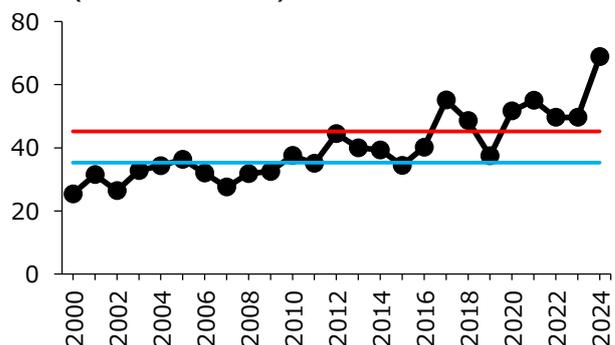
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の底びき網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、増減を繰り返しつつ長期的には増加傾向である。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キ口/生産者・日)



12. クロマグロ

(太平洋クロマグロ)

主な漁法と漁期

定置網：5～6月，10～2月



地方名：シビコ，シワカ，メジ，クロマグロ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

本種は、主に北緯20～40度の温帯域に分布するが、熱帯域や南半球にもわずかながら分布が見られる。0歳魚は夏期には表層混合内を遊泳し、冬季の黒潮離岸をきっかけに東方沖合域で回遊し、1歳以降は北太平洋に広く分布する。1～3歳魚は、太平洋を横断して東部太平洋に渡り、北米西岸を南北に回遊しながら数年滞在し、産卵のため西部太平洋に回帰する。

産卵期・産卵場

4～7月に南西諸島周辺海域を中心とした日本の南方～台湾の東沖、7～8月に日本海南西部で産卵が行われると考えられている。近年は、三陸・常盤沖の太平洋でも夏季に成熟した卵巣を持つ個体が確認され、仔魚も夏季に採集されている。主に肝臓に蓄えたエネルギーを利用して産卵を行い、1産卵期に数回産卵する多回産卵魚である。

成長・成熟

本種は、若齢期に急激に成長して5歳で尾叉長約160cmに達し、それ以降は成長速度が遅くなり、8歳で約200cm、12歳で極限体長の90%である226cmになる。寿命は20歳以上と考えられ、漁獲物の最大体長はおよそ300cm、体重は400kg以上に達する。日本海における産卵開始水温は20度前後で、成熟サイズについては、50%成熟サイズは約114cm（およそ3歳魚に相当）、95%成熟サイズは約134cm（およそ4歳魚に相当）と報告されている。

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

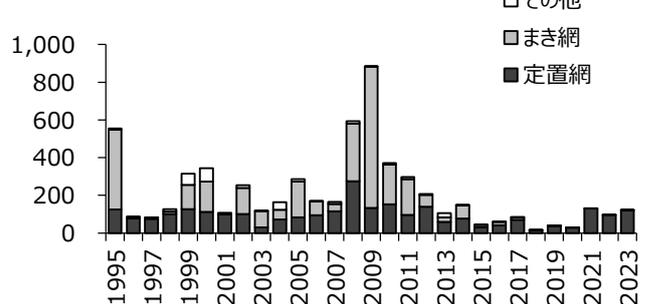
親魚資源量が最大となったのは1960年代で、近年は1990年代中頃のピークから2010年まで減少した後、徐々に回復している。2016年は過去の平均を上回る加入が推定された。2016年級群は、2015年から始まった厳しい漁業管理方策によって保護されており、未成魚を含めた総資源量は急激に回復している。現在の資源量は資源回復目標を下回っており、資源水準は低位、資源動向は増加している。

県内動向

漁獲動向

現在は主に定置網で漁獲されているが、過去にはまき網による漁獲も見られた。定置網では、秋漁期の10月～翌2月に0,1歳魚のメジ銘柄（20kg未満）が、春漁期の5月～6月にマグロ銘柄（20kg以上）が多く水揚げされている。県内主要港における漁獲量は、まき網と定置網を合わせ2009年が最高となっている。2015年からは、国際的な数量規制が行われている。県内主要港における2023年の漁獲量は123トンで前年を下回った。

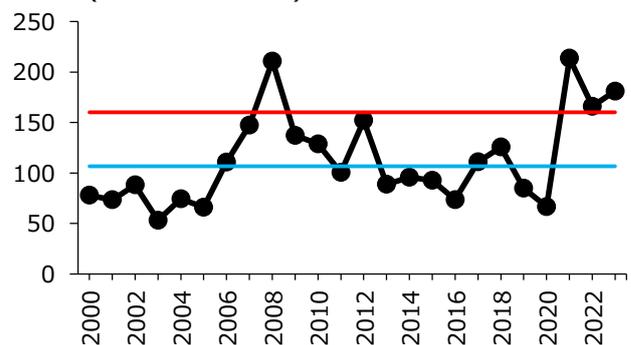
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の定置網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2021年で最も高く、2023年は過去20年間の中で3番目に高くなっている。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。しかし、2015年以降は国際管理による数量規制が行われているため、2014年以前との単純比較は難しい。

CPUE(キロ/生産者・日)



トピック

石川県では、定置網漁業では体重5kg未満、漁船漁業では体重2kg未満の生存個体の放流および出荷自粛を実施しているほか、定置網では個別割当て等による自主管理が行われている。

13. ケンサキイカ

日本海・東シナ海系群

主な漁法と漁期

定置網：6～9月
イカ釣り：8～10月



地方名：アカイカ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

暖水性種であり、青森県以南の日本周辺から東南アジア・オーストラリア北部までの島嶼周辺海域や大陸棚域に広く分布する。沿岸から沖合において季節移動を行うと考えられている。日本海南西部においては、九州西岸沖で越冬し、春から初夏に北上、秋以降に南下する群と、日本海南西海域の陸棚上で越冬し、春から初夏に西方向か東方向に移動する群の2つの回遊経路を持つ群があると推定されている。

産卵期・産卵場

本系群には複数の産卵場が存在するが、近年は東シナ海南部が主産卵場であると考えられる。東シナ海南部では周年で産卵しているが、春と秋に産卵盛期を持つとされる。

成長・成熟

雌より雄が大型になり、雌の最大外套背長は41cm、雄は50cmであり、寿命は1年と考えられている。成長には個体差が大きく、海域、季節、雌雄による違いが認められる。おおむね外套背長7～8cm（月齢約5ヶ月）程度から成熟個体が出現し、20cm前後（月齢約8ヶ月）でほぼ半数の雌が成熟する。

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

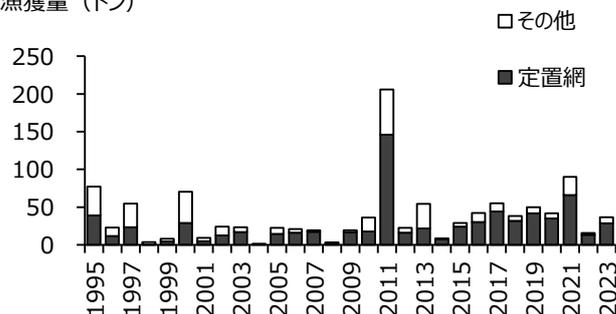
沿岸域と東シナ海におけるいか釣り漁業と沖底2そうおよび以西2そうの漁獲データを用いた資源量指標値は、2002～2018年はおおむね横ばいで推移していたが、2019年に大きく低下し過去最低値を示した。2020年以降は増加傾向にあるものの依然として低い水準となっている。

県内動向

漁獲動向

主に定置網で漁獲されている。周年漁獲されるが、特に5～9月の漁獲量が多い。県内主要港における漁獲量は、50トンを超えない年が多く、多獲される魚種ではないが、2011年には200トン以上漁獲されるなど、増減が激しい。県内主要港における2023年の漁獲量は37トンで前年を上回った。

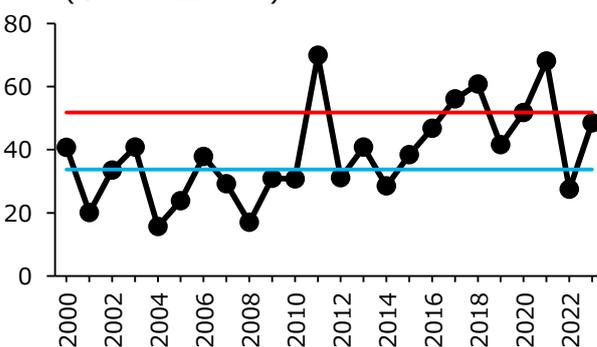
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の定置網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、激しく増減しているが、2009年以降はおおむね増加傾向にある。しかし、2022年には急減した。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は中位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



14. コウイカ

主な漁法と漁期

カゴ：4～5月
定置網：4～5月, 11～12月



生態⁽¹⁾

分布・回遊

本州中部以南から台湾、南シナ海に分布し、沿岸の100m以浅の砂泥底に生息するとされる。季節的な深淺移動や小規模な南北回遊を行う。孵化後は沖合の深場に移動し、そこで成長する。成熟すると産卵期には沿岸域に來遊する。

産卵期・産卵場

産卵期は春から初夏で、水温13～19℃の海域で産卵する。産卵場所は、水深10m以浅の内湾の沿岸とされる。

成長・成熟

寿命は1年で、外套長18cm、体重600gに達する。孵化後100日で貝殻長5～10cm、200日で10～15cmに達するが、その後の成長は遅いとされる。産卵を完了するとへい死すると考えられている。

資源動向(国による資源評価)

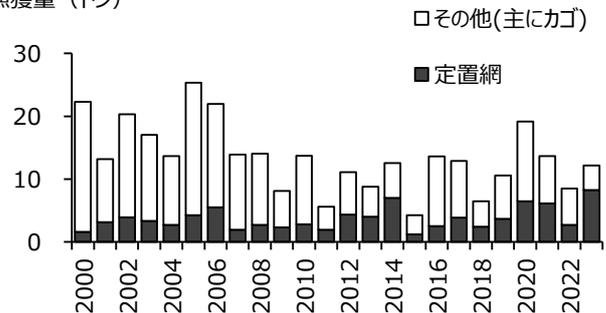
水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

漁獲動向

主にカゴおよび定置網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、2000年以降、2008年まで比較的好漁だったが、2009年に大きく減少して以降は増減を繰り返しつつ低調に推移し、横ばいもしくは微増している。なお、カゴは他の漁法から分離した正確な漁獲量の集計は困難である。県内主要港における2023年の漁獲量は12トンで前年を上回った。

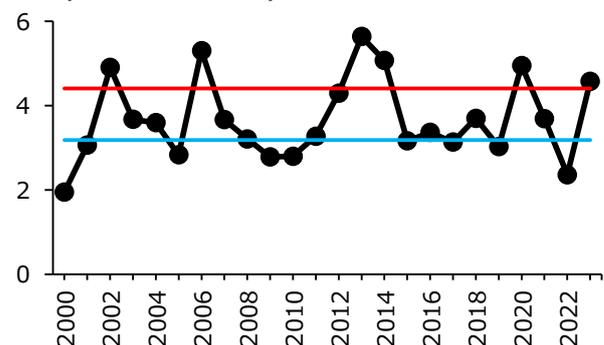
漁獲量 (トン)



來遊動向

県内の定置網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2000年以降、増減を繰り返しながらもおおむね横ばいで推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の來遊水準は高位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



15. サザエ

日本海域

主な漁法と漁期

採貝：7～9月
刺網：5～8月



生態(1)

分布・回遊

日本海側は北海道南部から九州、太平洋側では房総半島から九州にかけて、外洋性の岩礁域に分布する。水温6℃が生存の下限とされ、30℃では死亡率が高くなるという報告がある。卵は受精後10数時間でふ化し、浮遊期間は1～3日間、殻高20mmまでの個体は水深2m以浅に多く、成長とともに深所に拡大し、水深30m付近にも分布する。

産卵期・産卵場

産卵期は6～10月で、盛期は7～8月。場所により水温上昇期と下降期の2回、産卵ピークを持つものもある。

成長・成熟

石川県以北では蓋の内側に年に1本輪紋が形成されるが、以南では明瞭ではない。寿命は7～8年とされている。2～3歳で成熟する個体が出現し、4歳でほぼすべての個体が成熟する。

年齢	殻高(cm)
1歳	1～2
2歳	2～5
3歳	4～8
4歳	5～10

資源動向(国による資源評価)(1)

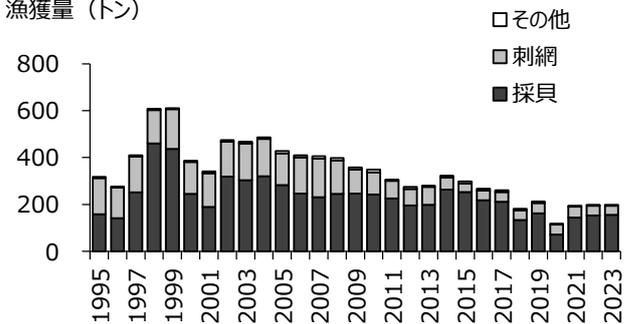
1965年以降の府県別漁獲努力量から、1988年の5,030トン进行ピークに、中長期的に減少傾向にある。2005年から3,000トンを下回るようになり、2020年には過去最低の1,432トンとなった。近年(2016年以降)の傾向は、新潟県では低い状態が維持され、石川県では増加している。

県内動向

漁獲動向

主に採貝で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、増加傾向だったが、1999年をピークにその後は減少傾向にある。県内主要港における2023年の漁獲量は199トンで前年並みであった。

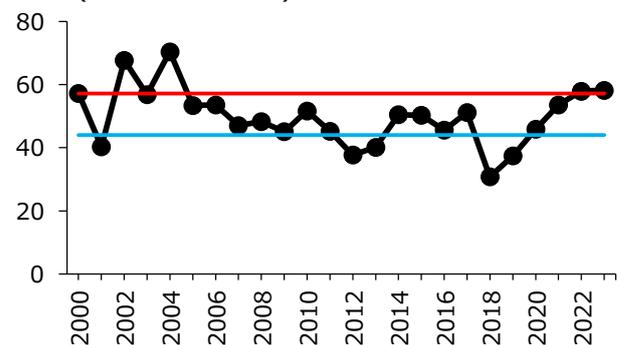
漁獲量(トン)



来遊動向

輪島支所の採貝のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、増減を繰り返しつつ、横ばいもしくは微増しており、2018年から増加している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キ口/生産者・日)



16. サバ類(主にマサバ)

対馬暖流系群

主な漁法と漁期

まき網：6～9月
定置網：2～3月，6～7月



地方名：サバ，ピン

生態⁽¹⁾

分布・回遊

商業上重要な水産資源であり、本系群は主に日本、中国、韓国のまき網漁業により漁獲されている。東シナ海南部から日本海北部、黄海や渤海にも及ぶ。春夏には索餌のため北上回遊し、秋冬に越冬・産卵のため南下回遊する。日本海北部で越冬する群もある。

産卵期・産卵場

産卵は東シナ海南部の中国沿岸から、朝鮮半島沿岸、九州・山陰沿岸にわたる広い海域で行われる。産卵期は南部ほど早く（1～4月）、北部ほど遅い（5～6月）傾向がある。

成長・成熟

成長は海域や年代等によってやや異なる。1～2歳で成熟し、成熟率は1歳で60%、2歳では85%、3歳で100%と見積もられている。

年齢	尾叉長 (cm)
1歳	25～28
2歳	29～32
3歳	33～35
4歳	～36
5歳	～37

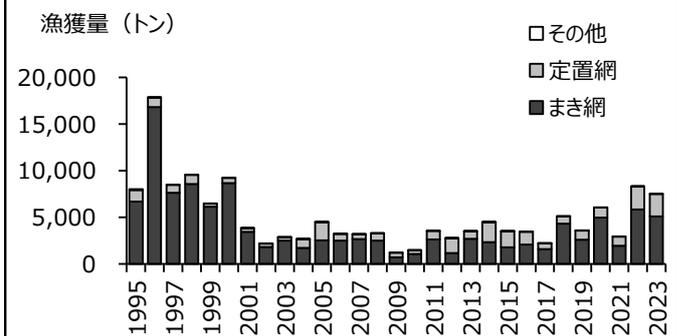
資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

本系群の資源量は1973～1996年には100万トン前後で推移したが、2000年以降は50万トンから60万トンで推移し、2021年の資源量は53万トン、親魚量は16万トンと推定された。最大持続生産量 (MSY) は32.3万トンで、これを実現する親魚量は31.0万トンと算定された。2021年の漁獲量は21.3万トン、親魚量は15.9万トンであった。漁獲圧は1980年台はMSYを実現する漁獲圧を下回っていたが、1994年以降は上回っている。

県内動向

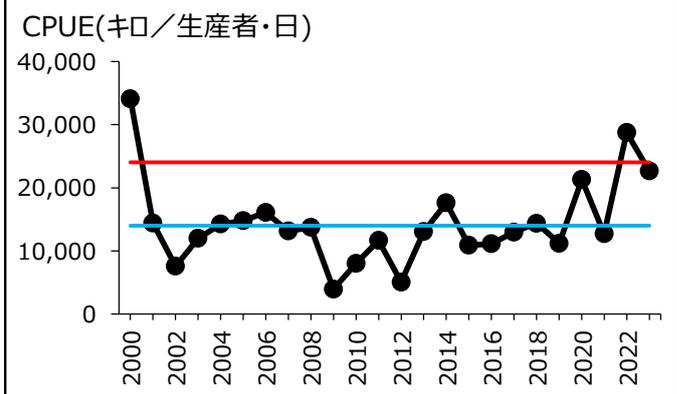
漁獲動向

主にまき網と定置網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、2001年に大きく減少してから低調で推移していたが、近年は増加傾向にある。県内主要港における2023年の漁獲量は7,524トンで前年を下回った。



来遊動向

県内の定置網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2002年まで急減して以降、増減を繰り返しながら概ね横ばいで推移していたが、近年は増加傾向にある。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は中位である。



17. サラガイ類

主な漁法と漁期

貝桁網：3～11月

地方名：シロガイ

生態(1)

分布・回遊

サラガイの他、近縁種にアラスジサラガイとベニサラガイがいる。

太平洋側では千葉県銚子以北、日本海側では鳥取県以北の本州、北海道、朝鮮半島、沿海地方およびサハリン沿岸に分布する。潮間帯から水深20mまでの、河川水の流入が少ない砂泥底に潜って生息する。

ばくだい

産卵期・産卵場

産卵期は、北海道においては6～10月とされる。

成長・成熟

受精後、浮遊幼生期を経て底生生活に移るが、浮遊期間の長さは不明である。成長は他の二枚貝に比べて遅い。雄は6歳前後、雌は8歳前後で成熟するとされる。寿命は20年以上とされる。

年齢	殻長(cm)
1歳	1.3
3歳	3.6
5歳	5.3
10歳	7.9
15歳	9.3

資源動向(国による資源評価)

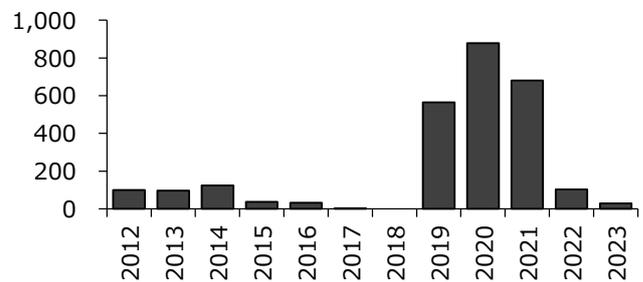
水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

漁獲動向

主に羽咋海域の貝桁網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、重量が記録されていないため不明である。そこで、漁獲金額を集計したところ、2012年以降、低調に推移していたが、2019年に急増して以降、2021年まで好調で、2022年に急減した。県内主要港における2023年の金額指数は29で前年を下回った。

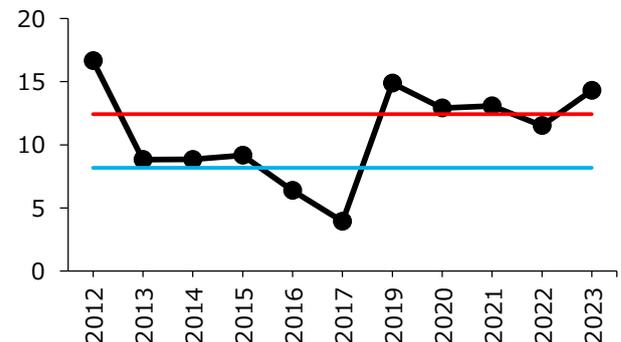
金額指数(2012年を100とする)



来遊動向

羽咋海域の貝桁網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲金額)は、2012年以降、2017年まで減少傾向で、2019年に急増したが、その後は微減している。2012年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(2012年を100とした金額指数/生産者・日)



18. サワラ

日本海・東シナ海系群

主な漁法と漁期

定置網：9～12月



地方名：サワラ，サゴシ，ヤナギサワラ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

分布は、東シナ海から黄海、渤海、北海道以南の日本海に及ぶ。日本海に分布するサワラは、0～1歳の時期に日本海に留まり、その分布を日本海北部にまで拡大するが、2歳の時に南下して産卵場である東シナ海まで回遊すると考えられる。

産卵期・産卵場

産卵期は、日本海、東シナ海系群では3～6月頃とされる。産卵場は、福建省沿岸（3～4月）、黄海沿岸（5月中旬～6月中旬）、および渤海湾から遼東湾（5月下旬～6月上旬）である。日本海における産卵活動の有無は不明。

成長・成熟

雌雄ともに1歳魚の一部が成熟を開始し、2歳魚以上では大部分が成熟する。成長には雌雄差があり、2歳以上において雌は雄に比べ成長が速い。日本海沿岸で漁獲された個体の耳石を用いた年齢査定結果と月別尾又長組成のモード（頻度）追跡から判断すると、満1歳で尾又長40cm台ないし50cm台、満2歳で60cm台ないし70cm台に成長すると見なされる。寿命は、6歳程度と推定される。

県内では、50cm以下でサゴシ、50～70cmでヤナギ、70cm以上でサワラと呼ばれている。

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

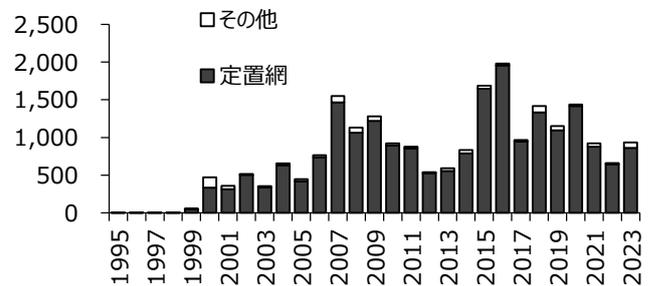
資源量水準は、京都府・石川県・富山県で操業する定置網の標準化CPUE（大型定置網標準化CPUE）を日本海の資源量指標値として推定した。過去3年間（2020～2022年）は比較的高い値で推移していたが、2022年の資源量指標値は目標管理基準値案を下回り、限界管理基準値を上回った。

県内動向

漁獲動向

主に定置網で漁獲されている。産卵期（3～6月）を過ぎたあたりから入網し始め、9～12月に多く漁獲される。県内主要港における漁獲量は、2000年ごろから漁獲が始まり2007年まで上昇傾向が続き、そこから2012年まで減少したものの、2016年にピークを迎えるまで再び上昇し、その後減少傾向となっている。県内主要港における2023年の漁獲量は933トンで前年を上回った。

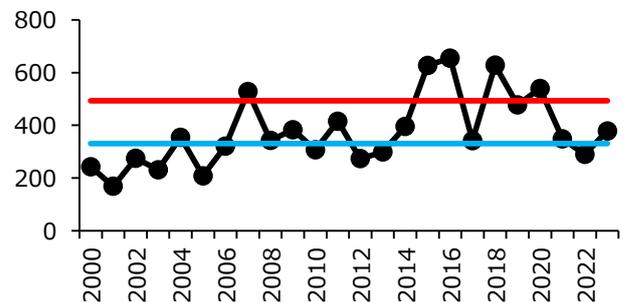
漁獲量（トン）



来遊動向

県内の定置網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2000年代半ばから上昇傾向にあったが、2016年をピークに以後減少または横ばいとなっている。2000年以降のCPUEの動向によると、現在の来遊水準は中位である。

CPUE（キロ/生産者・日）



19. シロギス

日本海

主な漁法と漁期

刺網：5～10月



地方名：キス

生態⁽¹⁾

分布・回遊

北海道積丹半島から九州南岸の日本海・東シナ海沿岸、北海道襟裳岬から九州南岸の太平洋沿岸、瀬戸内海、朝鮮半島南岸および西岸、台湾、中国東シナ海、南シナ海に分布する。春季より産卵のために浅海域に移動する。

産卵期・産卵場

山形県沿岸での調査では、生殖腺の発達状況から産卵期は6～9月、盛期は7～8月とされる。

成長・成熟

山形県沿岸での調査では、体長は1歳で12cm、2歳で18cm、3歳で20cmと推定されているが、成長速度は海域によって異なるとされる。新潟県での調査では、漁獲最盛期（6月）に漁獲の主体となる2～3歳は雌雄とも大半が成熟していた。

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

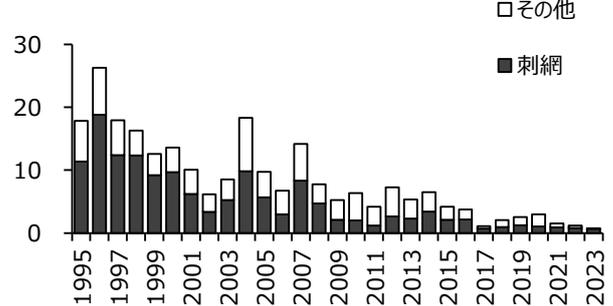
資源量指標値が得られていないため、長期データのある秋田県、山形県、新潟県の合計漁獲量（1991～2021年）を用いて水準と動向を判断した。長期的な動向は減少傾向で、2021年の水準は低位となっている。

県内動向

漁獲動向

主に刺網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、1996年をピークに2002年にかけて急激に減少し、その後、増減を繰り返しながらも低調に推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は0.7トンで前年を下回った。

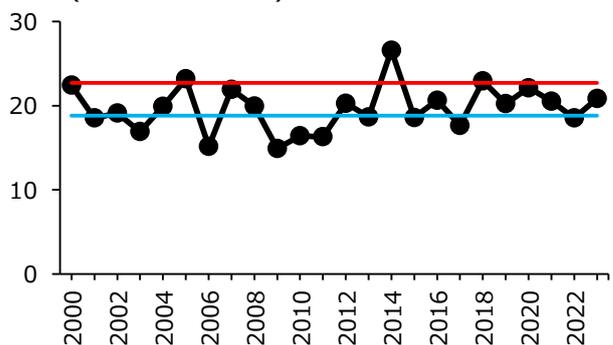
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の刺網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2000年以降、増減を繰り返しつつ、おおむね横ばいで推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は中位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



20.スズキ

主な漁法と漁期

定置網：12～1月
底びき網：3～5月



地方名：スズキ，セイゴ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

日本の沿岸各地から南シナ海に分布する。波の荒い沿岸や内湾、河口域の岩礁域や人工漁礁に生息する。若魚は汽水域や淡水域にも出現する。季節的な深淺移動を行い、夏季には浅場で、冬季には比較的深場で生活する。

産卵期・産卵場

産卵期は、晩秋から春にかけてで、土佐湾では11～4月、紀伊水道や東京湾では11～1月とされている。産卵適水温は10℃前後と考えられている。産卵場は、外洋に面した沿岸の水深50mの岩礁域とされる。

成長・成熟

体長は90cmに達する。2～3歳で成熟し始めるとされる。

	体長 (cm)	体重 (g)
1歳	20～25	200
2歳	30～35	500
3歳	40～45	900
4歳	50	1,400
5歳	60	2,000
6歳	65	3,000

資源動向(国による資源評価)⁽²⁾

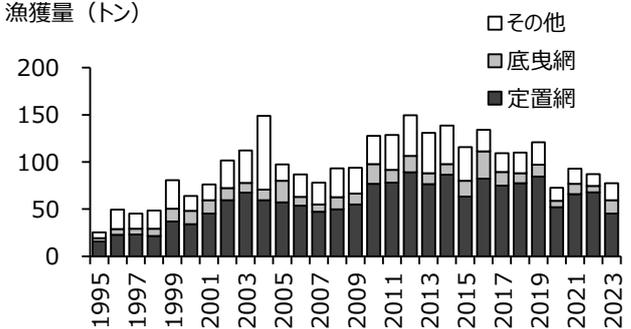
本資源は広い海域で多様な漁法で漁獲される特徴を持ち、対象海域と漁法を網羅する努力情報を得られないことから、海域全体では資源水準の判断は行わないこととした。

県内動向

漁獲動向

主に定置網と底びき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、2004年まで増加し、その後、2007年まで減少したが、2012年まで増加した。2012年以降は緩やかな減少傾向となっている。県内主要港における2023年の漁獲量は77トンで前年並みであった。

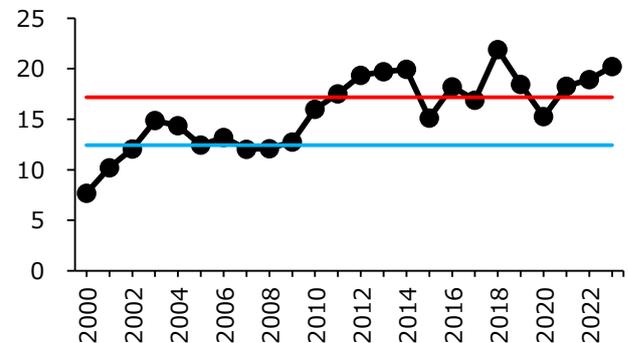
漁獲量 (トン)



来遊動向

県内の定置網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2000年から2003年まで増加傾向であり、その後2009年まで概ね横ばいに推移、2009年から2014年にかけて再度増加傾向となり、2014年以降は増減を繰り返しながら概ね横ばいに推移している。2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



出典：(1) 現代おさかな事典 阿部宗明, 本間昭郎 エヌ・ティー・エス 1997, p429-431
(2) 令和5年度(2023)年度 資源評価調査報告書(新規拡大種)

21-1. スルメイカ

秋季発生系群

主な漁法と漁期

イカ釣り：5～7月



地方名：マイカ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

本系群の主群は、10～12月に北陸沿岸域から東シナ海北部で発生し、稚仔は対馬暖流により日本海に流入し、春夏季に北上、秋季に南下する回遊を行う。一部は津軽海峡を通じて太平洋、宗谷海峡を通じてオホーツク海へ回遊し、分布する。

産卵期・産卵場

本系群の産卵期は主に10～12月、産卵場は北陸沿岸域から東シナ海北部である。

成長・成熟

単年性であり、1年で成長・成熟し、産卵後に死亡する。雄は孵化後約9ヶ月で成熟し、雌と交配し始める。雌は孵化後10ヶ月以降、産卵直前に急速に生殖器官を発達させ、生活史の最後に産卵して死亡する。本系群は海域によって成長速度が異なるとされており、日本海における月齢ごとの体重および外套背長は以下の通りである。

月齢	体重(g)	外套背長(cm)
4ヶ月	4.8	5.3
5ヶ月	29.6	10.6
6ヶ月	64.9	14.2
7ヶ月	136	18.7
8ヶ月	227	21.9
9ヶ月	281	23.5

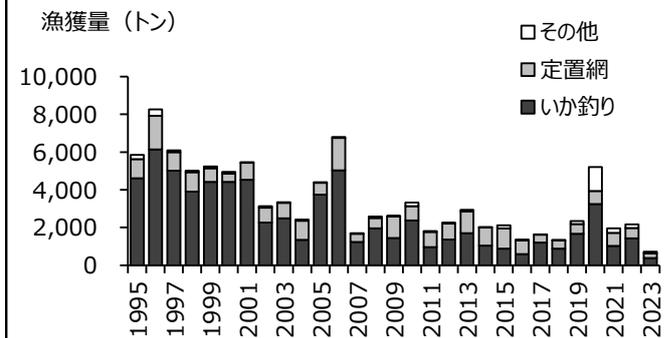
資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

本系群の資源量は、1980年代の低い水準から1990年代に増加し、1990年代後半から2010年代前半に高い水準だったが、2016年以降は減少傾向にある。最大持続生産量(MSY)は27.3万トンで、これを実現する親魚量は32.9万トンとされる。2021年は漁獲量は4.9万トン、親魚量は19.4万トンで、漁獲率はMSYを実現する漁獲率を下回っていた。本系群はTAC管理魚種であり、3年間漁獲量一定方針を基本とする。2022～2024年の漁獲可能量は、親魚量が禁漁水準(3.0万トン)を下回らないと予測された場合、12.7万トンとされている。

県内動向

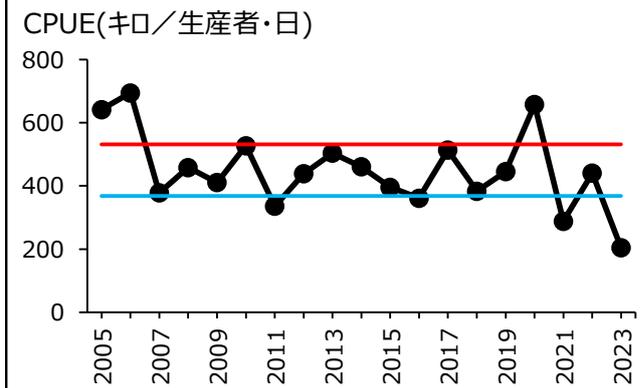
漁獲動向

本種は、主にイカ釣りおよび定置網で漁獲されており、特に本系群は多くが春夏季のイカ釣りで漁獲されている。イカ釣りの主漁期は従来、5～6月だったが、近年は6～7月と1ヶ月ほど遅れる傾向にある。県内主要港における漁獲量は、2000年代前半以降、低調に推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は721トンで前年を下回った。



来遊動向

県内の小型イカ釣りのCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2000年代半ば以降、おおむね横ばいに推移していたが、2021年以降、減少傾向にある。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。



トピック

能登町の小木は、中型イカ釣り船団の母港として全国的に有名である。

21-2. スルメイカ

冬季発生系群

主な漁法と漁期

定置網：1～6月



地方名：マイカ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

本系群は、冬季に本州以南の暖水域に分布し、対馬暖流により日本海の、黒潮により太平洋のそれぞれ北方冷水域へ移送される。日本海を北上する群は、一部は宗谷海峡からオホーツク海まで達し、成熟が進むにつれて産卵海域と推定される東シナ海に向かう南下回遊に切り替わる。

産卵期・産卵場

本系群の産卵場は、卵の採集例がないため特定されていないが、成熟個体や孵化直後と推定される幼生の分布から、東シナ海に主産卵場があると推定されている。主産卵期は、幼生や産卵群の出現状況から12～3月と推定されている。

成長・成熟

単年性であり、1年で成長・成熟し、産卵後に死亡する。成熟を始めるのは、雄は孵化後6～7ヶ月、雌は孵化後7～8ヶ月以降である。本系群の月齢ごとの平均的な体重および外套背長は以下の通りである。

月齢	体重(g)	外套背長(cm)
4ヶ月	10	8.4
5ヶ月	45	13.4
6ヶ月	121	18.3
7ヶ月	233	22.4
8ヶ月	361	25.7
9ヶ月	484	28.1

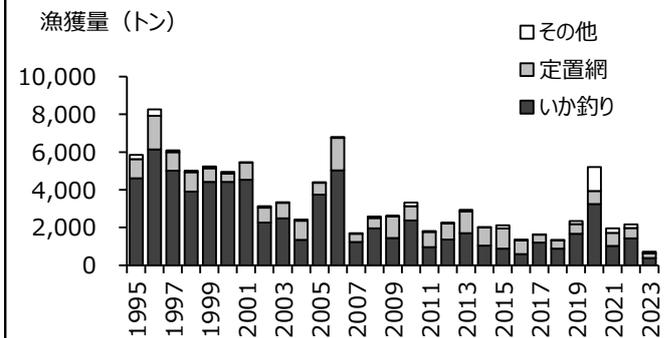
資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

本系群の資源量は、1980年代は低調だったが、1989年以降増加し、大きく増減しつつも比較的高い水準で推移した。しかし、2015年から大きく減少に転じ、その後は低調に推移している。最大持続生産量(MSY)は14.9万トンで、これを実現する親魚量は23.4万トンとされる。2022年は、漁獲量は2.0万トン、親魚量は5.6万トンで、漁獲率はMSYを実現する漁獲率を下回っていた。本系群はTAC管理魚種であり、3年間漁獲量一定方針を基本とする。2022～2024年の漁獲可能量は、親魚量が禁漁水準(1.4万トン)を下回らないと予測された場合、0.5万トンとされている。

県内動向

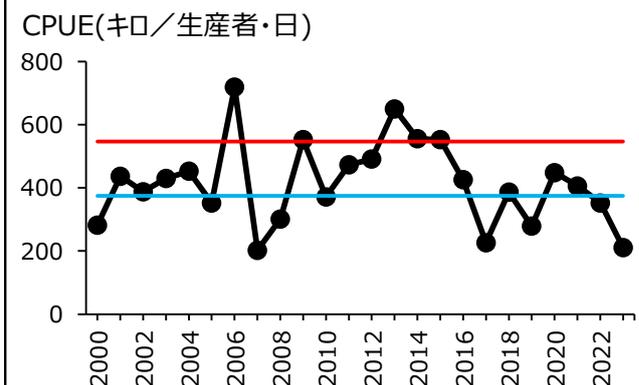
漁獲動向

本種は、主にイカ釣りおよび定置網で漁獲されており、特に本系群は多くが冬季および春季の定置網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、2000年代前半以降、低調に推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は721トンで前年を下回った。



来遊動向

県内の1～6月の定置網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2007年に急減してから上昇傾向だったが、2013年をピークに2017年まで減少し、近年は増減を繰り返して概ね横ばいとなっている。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。



トピック

能登町的小木は、中型イカ釣り船団の母港として全国的に有名である。

22.ズワイガニ

日本海系群A海域

主な漁法と漁期

底びき網：(雄) 11～3月
(雌) 11～12月



地方名：加能ガニ（雄）・香箱ガニ（雌）

生態(1)

分布・回遊

大陸棚斜面の縁辺部および日本海中央部の大和堆の水深200～500mに多く分布する。成熟後は雌雄で主分布水深が異なり、260～300mを境に深い海域では雄が、浅い海域では雌が主に分布する。幼生は、孵化後約2～3ヶ月の浮遊幼生期を経て稚ガニに変態し、着底する。

産卵期・産卵場

雌は、10歳の夏から秋にかけて最終脱皮し、11歳となった直後に交尾と初産卵を行う。初産卵後は、1年半の抱卵期間を経て、翌々年の2～3月に幼生が孵化する。孵化後まもなく雌は2回目の産卵を行う。経産卵後の抱卵期間は1年間であり、毎年2～3月に産卵を行う。

成長・成熟

孵化から6歳までは1年間に複数回脱皮するが、以降は概ね1年に1回脱皮し、最終脱皮を行うと体成長が止まる。孵化から漁獲サイズへ成長するまでの期間は7～8年、寿命は10歳以上と考えられる。雄では主に11歳から最終脱皮後の個体が発見され、雌では11歳までにすべての個体が最終脱皮を行う。最終脱皮後の雄は体サイズに対し鉗脚掌部（はさみ）が大きくなり、最終脱皮後の雌は腹部が大きくなり外卵をもつ。

資源動向(国による資源評価)(1)

資源量は2002年以降増加傾向にあったが、2007年をピークに減少に転じていた。しかし、2022年以降は再度増加に転じている。最大持続生産量（MSY）は3.7千トンで、これを実現する親魚量は3.0千トンと算定された。2022年の親魚量は3.0千トンでMSYを実現する水準を下回り、2022年の漁獲量は2.0千トンで漁獲圧はMSYを実現する漁獲圧を下回っていた。

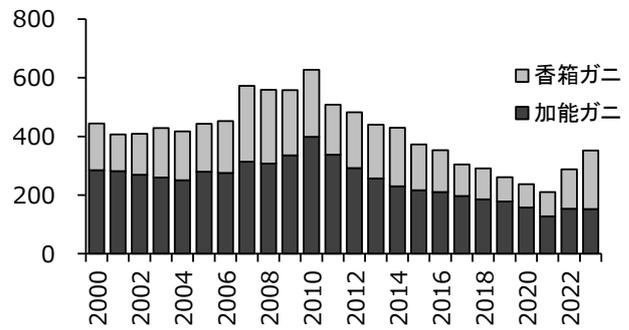
県内動向

漁獲動向

雄は加能ガニ、雌は香箱ガニと呼ばれ、本県の冬を代表する魚種である。本県では、底びき網でのみ漁獲されている。県内主要港における漁獲量は2010年漁期をピークに減少傾向が続いていたが、2022年漁期以降は増加に転じている。県内主要港における2023年漁期の漁獲量は加能ガニが152トンで前年漁期並み、香箱ガニが200トンで前年を上回った。

漁獲量(トン)

※漁期：11～3月

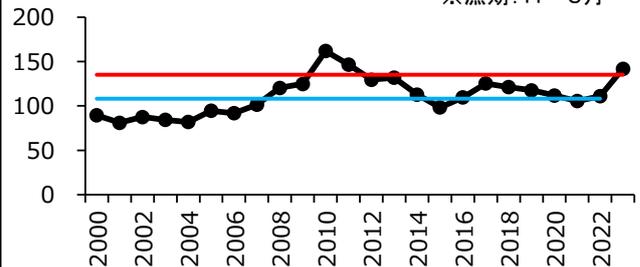


来遊動向

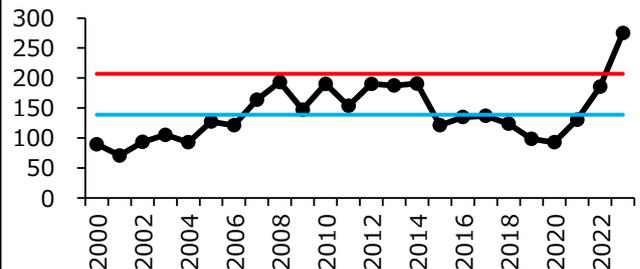
県内主要港における底びき網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2000年代後半から比較的高い水準で推移している。近年は香箱ガニのCPUEの増加が顕著となっている。2000年漁期以降のCPUEの動向によると、2023年漁期の来遊水準は加能ガニ：高位、香箱ガニ：高位である。

CPUE(kg/(生産者・日)) 加能ガニ

※漁期：11～3月



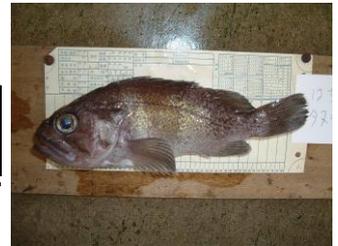
CPUE(kg/(生産者・日)) 香箱ガニ



23. タヌキメバル

主な漁法と漁期

刺網：3～7月
釣り：5～10月



地方名：クロカラ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

単一の魚種での研究がほとんど行われていないため、ここでは1976年まで同一種とされていたキツネメバルの知見を記述する。

北海道から山口県の日本海沿岸、北海道から福島県の太平洋沿岸、朝鮮半島南岸・東岸に分布する。未成魚は水深5～50m、成魚は100～200mの海域に生息する。

産卵期・産卵場

卵胎生であり、5～6月に仔魚を生み出す。

成長・成熟

成長に雌雄の差は認められない。最高年齢は35歳程度で、雌雄とも8歳までに大部分が成熟するとされる。

年齢	標準体長(cm)
1歳	8.9
2歳	12.8
3歳	16.1
4歳	19.0
5歳	21.4
6歳	23.5

資源動向(国による資源評価)

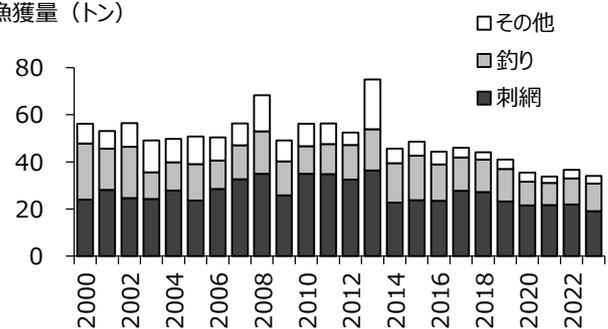
水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

漁獲動向

輪島支所でのみ他魚種と分けて集計されているため、ここではタヌキメバル・キツネメバル・クロソイの合計の漁獲量を紹介する。主に刺網と釣りで漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、2000年以降、安定して推移していたが、2014年ごろから微減している。県内主要港における2023年の漁獲量は34トンで前年並みであった。

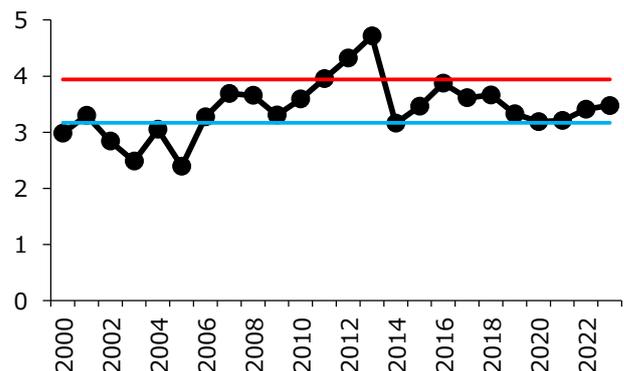
漁獲量(トン)



来遊動向

輪島支所の刺網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2006年から2013年までは増加傾向だったが、2014年に急減すると、その後は減少した水準で横ばいとなっている。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は中位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



トピック

キツネメバル・クロソイと外見がよく似ている。特にタヌキメバルとは「マズイ」などの名前でも同種として扱われることも多い。

24. チカメキントキ

主な漁法と漁期

釣り・刺網：7～10月



地方名：キンパチ, キントキバチメ, キンメ

生態(1)

分布・回遊

本種は、北海道襟裳岬から屋久島の太平洋沿岸、青森県から九州南岸の日本海・東シナ海沿岸、瀬戸内海、東シナ海大陸棚縁辺域：韓国釜山、済州島、台湾海峡、広東省、インドから西太平洋（紅海を除く）に分布し、主に岩礁域や貝殻混じりの砂～貝殻・泥混じりの砂底域に生息する。

産卵期・産卵場

日本海域における本種の産卵期・産卵場は不明である。他海域の報告として、東シナ海の産卵期は6～9月と推察されている。

成長・成熟

本種の年齢と成長に関する知見は得られていないが、成熟サイズについては、雌では体長30cm以上になると成熟個体が出現し、35cm以上の個体では大部分が成熟していると報告されている。雄では明らかではない。

資源動向(国による資源評価)

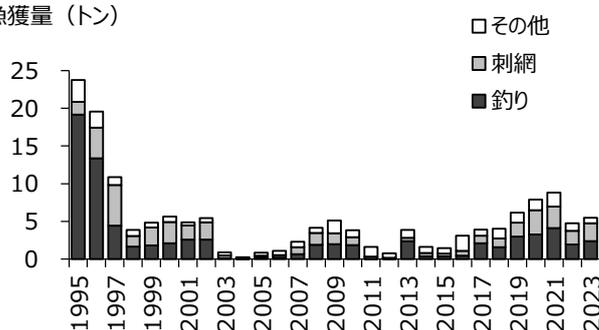
日本海域で漁獲される本種の資源動向や資源水準を判断するための長期的な漁獲量や資源量指標値は現時点では得られていない。漁獲動向に関しては、経年的な漁獲量情報が得られた3県（山口県、鳥取県、石川県）での漁獲量の推移から増加と判断される。

県内動向

漁獲動向

主に釣り、刺網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、1998年まで急減し、その後は増減しつつも横ばいとなっている。県内主要港における2023年の漁獲量は5.5トンで前年並みであった。

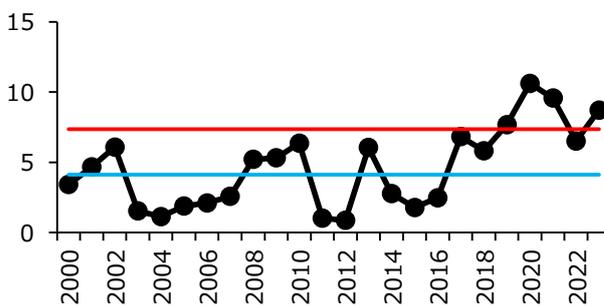
漁獲量 (トン)



来遊動向

本種は、釣り漁業における漁獲主対象ではないため参考程度ではあるものの、県内の釣り（延縄含む）のCPUE（1隻×1日当たりの漁獲量）は、2012年に最小となった後、上昇傾向にある。2000年以降のCPUEの動向によると、現在の来遊水準は高位である。

CPUE (キロ/隻・日)



トピック

「他県地方名」

- ・アカベイ（和歌山県）
- ・カゲキヨ（神奈川県、千葉県銚子）
- ・キンキン、アカメ（鹿児島県）
- ・イーキブヤー（沖縄県）

25.トラフグ

日本海・東シナ海・瀬戸内海系群

主な漁法と漁期

定置網：4～5月
はえ縄：11～2月



地方名：クマサカ

生態(1)

分布・回遊

本県沿岸で漁獲される系群は日本海、東シナ海、黄海、瀬戸内海に分布する。春に発生した仔稚魚は産卵場周辺を成育場とし、成長に伴って日本海、東シナ海、黄海へ移動する。

産卵期・産卵場

本県沿岸で漁獲される系群の主な産卵場は、八郎潟周辺、七尾湾、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸、備讃瀬戸とされ、朝鮮半島、中国沿岸にも存在するとされる。産卵は3月下旬に九州南部から始まり、水温の上昇とともに北上し、瀬戸内海での産卵は4～5月とされ、若狭湾、七尾湾では4～6月とされる。

成長・成熟

寿命は10年以上と推定され、雌雄いずれも最大で全長60cm以上に成長する。雌雄で成長が異なり、雌の方が成長が早い。雄は2歳、雌は3歳で成熟する。

資源動向(国による資源評価)(1)

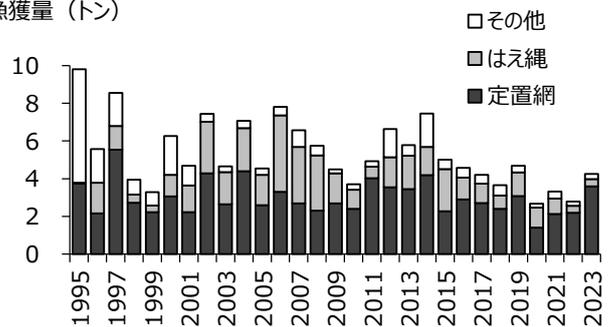
資源量は、2006年漁期の1,174トンから減少傾向で、2022年漁期の資源量は678トンであった。最大持続生産量(MSY)は191トンで、これを実現する親魚量は577トンと算定された。2022年の親魚量は427トンでMSYを実現する水準を下回り、2022年の漁獲量は134トン(概数値)で漁獲圧はMSYを実現する水準を上回っていた。

県内動向

漁獲動向

主に定置網とはえ縄で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、概ね3トンから10トンの間で増減を繰り返し、2015年以降は減少傾向となっている。県内主要港における2023年の漁獲量は4.3トンで前年を上回った。

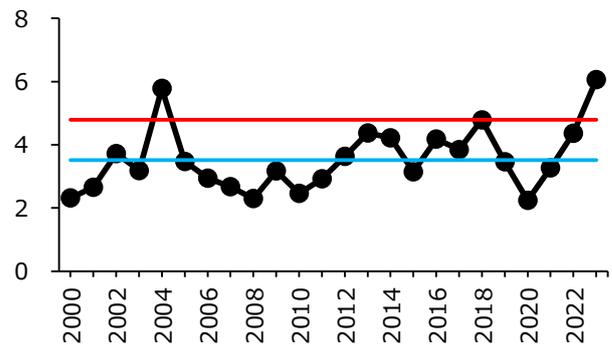
漁獲量(トン)



来遊動向

県内主要港における定置網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は2000年以降、増減を繰り返しており、直近では2020年に低い値となって以降、増加傾向にある。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



26. ニギス

日本海系群

主な漁法と漁期

底びき網：3～6月，9～10月



生態(1)

分布・回遊

日本海における本種は、水深60～200mの砂泥底に分布する。0歳魚は水深60～80mに分布し、成長に伴い分布水深が深くなる傾向がある。水深130～170mの範囲では複数の年齢群が重複して存在する。

産卵期・産卵場

年間を通じて産卵が行われるが、産卵の盛期は春と秋である。産卵周期は親魚の発生群にかかわらず概ね半年に1回であり、同一個体が複数の産卵期に産卵すると考えられている。石川県沖・山陰沖では一部の個体が満1歳から産卵を開始する。佐渡海峡および富山湾では水深50mを中心に卵稚仔が得られており、深層浮遊卵であると考えられている。

成長・成熟

日本海で採集された本種の年齢-体長関係に海域差はほとんどみられない。また、季節発生群による成長の違いもみられず、最大で5～6歳まで生存することが報告されている。ただし、5歳以上の採集例は少ない。石川県沖では1.5歳までに多くの個体が成熟するとされ、山陰沖では満3歳までにすべての個体の成熟が完了することが知られている。

	標準体長 (cm)
満1歳	12
満2歳	16
満3歳	18
満4歳	20
満5歳	22

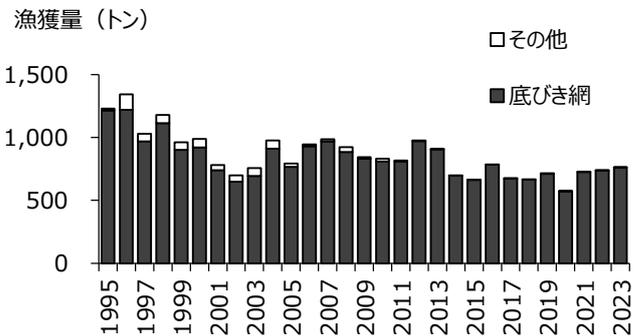
資源動向(国による資源評価)(1)

資源量水準は、本系群の主要漁業である1そうびき沖底の過去の単位努力量当たり漁獲量 (CPUE, kg/網) を標準化したもの (資源量指標値) に、累積正規分布をあてはめ推定している。2022年の資源量指標値は42.1%水準であると評価されており、目標水準 (80%水準) および限界水準 (56%水準) を下回るため、漁獲量を減少させる必要があると考えられる。

県内動向

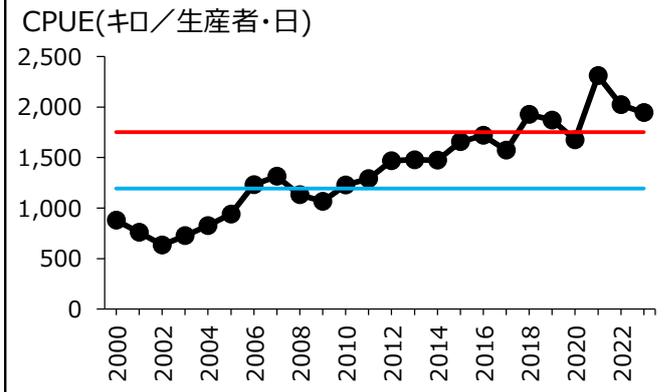
漁獲動向

主に底びき網で漁獲されている。底びき網では禁漁期間の7～8月を除き、周年漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、1996年をピークに2002年まで減少傾向が続き、その後は増減しつつも横ばいとなっている。県内主要港における2023年の漁獲量は763トンで前年並みであった。



来遊動向

県内の沖合底曳網のCPUE (1隻×1日当たりの漁獲量) は、2021年に最高値で、2022～2023年にかけてはやや減少したものの、2000年代初め以降、現在に至るまで上昇傾向がみられる。2000年以降のCPUEの動向によると、現在の来遊水準は高位である。



トピック

ニギスは、シロギスに姿が似ていることから似鱈と書きますが、分類上は全く異なり、脂ビレを持つことから大きく分けるとサケの仲間に入ります。

27. バイ

主な漁法と漁期

カゴ：3～8月
底びき網：11～6月



地方名：アズキガイ

生態(1)

分布・回遊

北海道南部から九州、朝鮮半島沿岸、中国大陸沿岸に分布する。水深50m以内の内湾や外洋に面した浅海域に生息し、潮間帯から水深20mまでに多い。海底の砂泥中に潜り、水管だけを海底上に出して生息する。

産卵期・産卵場

産卵期は初夏から夏(6～8月)で、水温19～28度で産卵するとされる。卵は寒天質の卵嚢に包まれ、海底の貝殻や転石上に産みつけられる。

成長・成熟

卵から0.8～0.9mmのベリジャー幼生で孵化し、2～3日間浮遊した後、底生生活に移行する。着底直後の稚貝の殻長は0.8～1mmとされる。殻長5～6cmから成熟し始めるとされる。

	殻高(mm)
1歳	3～4
2歳	5～6
3歳	6～7
4歳	7～8

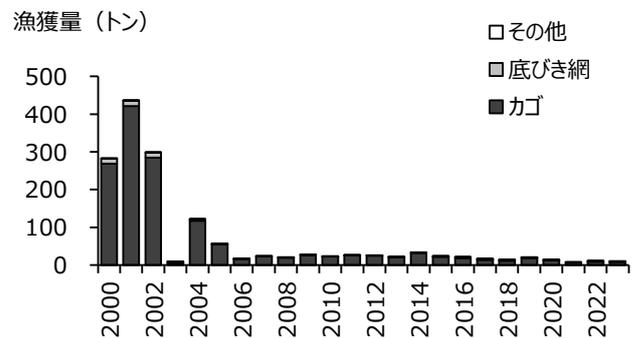
資源動向(国による資源評価)

水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

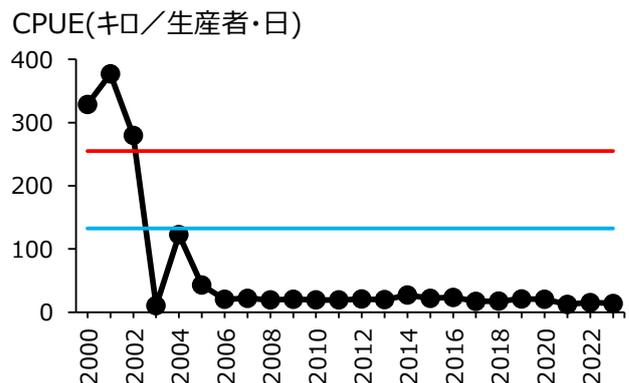
漁獲動向

主にカゴで漁獲されている。以前は漁獲のほとんどがカゴであったが、近年は底びき網が1～2割程度を占めるようになってきている。県内主要港における漁獲量は、2002年まで300トン前後で推移していたが、2003年に激減し、2006年以降は低調で推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は9.5トンで前年を下回った。



来遊動向

県内のカゴのCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2000年以降、2002年まで高い水準にあったが、その後、急激に減少し、2005年以降は低い水準で横ばいとなっている。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。



トピック

市場で「バイ」と呼ばれる貝は、エッチュウバイ、カガバイ、エゾボラモドキ、ツバイ等、多数種を含む。

28.ハタハタ

日本海西部系群

主な漁法と漁期

底びき網：3～6月，9月



地方名：ハタハタ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

ハタハタ日本海西部系群は、能登半島以西の日本海西部に分布し、漁獲対象となっているものである。当該海域は秋田県沿岸生まれ群と朝鮮半島東岸生まれ群の双方の生育場であり、両群の出現割合はそれぞれの資源状況によって年変動するとされている。

産卵期・産卵場

産卵場は、主に朝鮮半島東岸および秋田県や青森県の沿岸と推察される。能登半島以西の本州沿岸では、産み付けられた卵やふ化直後の仔魚の報告はあるものの、秋田県沿岸のような大規模な産卵場はない。

成長・成熟

寿命はおよそ5歳とされ、満1歳の2～3月頃には体長（標準体長）100mmに達し、2歳で体長150mm、3歳で体長170mm、4歳で体長190mmとなる。いずれの年齢でも雌のほうが大きい。

雄は1歳時の夏季から成熟を始め、その年の年末には再生産に関わる。一方、雌は1歳時ではその多くは成熟せず、主に2歳時の年末から産卵に参加すると推察される。

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

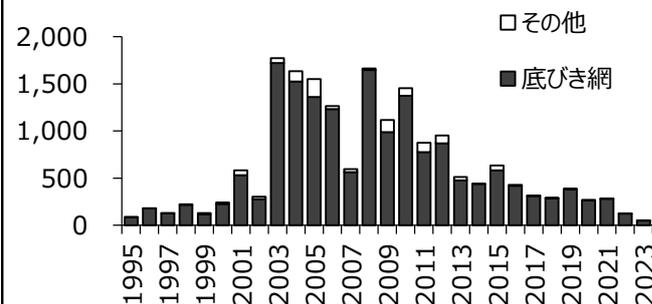
沖底（1そうびき）の資源密度指数（kg/網）の3年間（当年、前年、前々年）の平均値の推移より、資源水準は高位と判断された。また、トロール調査に基づく資源量の直近5年間の推移から資源動向は減少と判断された。

県内動向

漁獲動向

主に底びき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、2003年に急増し、2012年まで高水準を維持していたが、2013年以降は減少傾向が続いている。県内主要港における2023の漁獲量は48トンで前年を下回った。

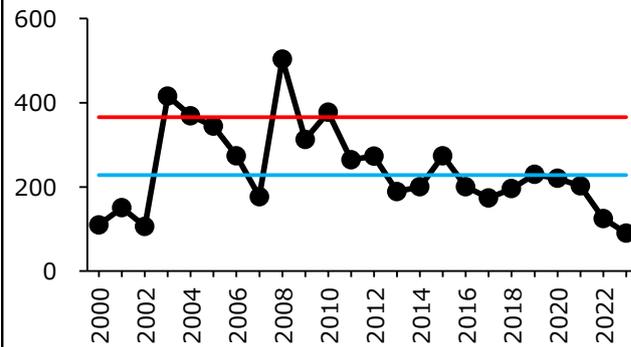
漁獲量（トン）



来遊動向

県内主要港における底びき網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は2003年に急増した後、一度減少し、2008年に再度急増した。2009年以降は増減を繰り返しながら緩やかに減少していたが、2021年以降は急激に減少している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



29. ハツメ

主な漁法と漁期

刺網：8～10月
底びき網：5～6月



生態⁽¹⁾

分布・回遊

本種は、北海道～山口県の日本海沿岸、北海道オホーツク海沿岸、北海道～福島県の太平洋側沿岸、房総半島沖、稀に相模湾、朝鮮半島東岸中部～間宮海峡、オホーツク海の水深100～300mに分布する。

産卵期・産卵場

本種は胎生魚である。産仔期は明らかではないが、日本海における浮遊仔稚魚の出現期は8～11月にかけてであり、北部で早く、南部で遅い。

成長・成熟

不明である。

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

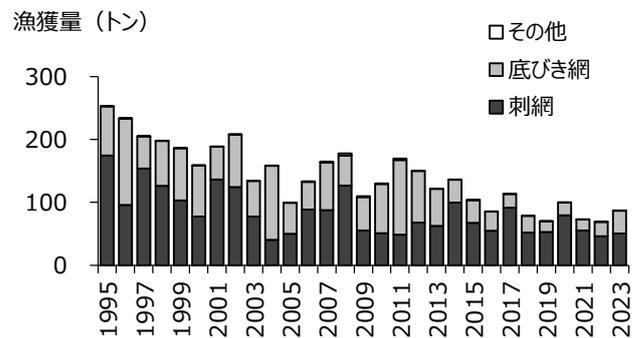
生物学的特性や資源構造には不明な点が多く、さらなる情報収集が必要であるため、現状資源動向は不明である。

漁獲動向の判断には、日本海側で漁獲量が最多の石川県の漁獲量を用いており、横ばいと考えられている。

県内動向

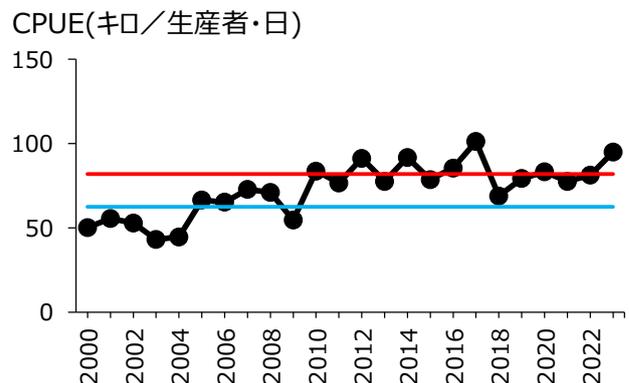
漁獲動向

主に刺網と底びき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年をピークに減少傾向となり、2015年以降は横ばいとなっている。県内主要港における2023年の漁獲量は86トンで前年を上回った。



来遊動向

県内の刺網のCPUE (1隻×1日当たりの漁獲量)は、2000年以降緩やかな上昇傾向にあり、2017年にピークを迎えたのち、横ばいである。2000年以降のCPUEの動向によると、現在の来遊水準は高位である。



30.ヒラメ

日本海中西部・東シナ海系群

主な漁法と漁期

定置網：4～5月
底びき網：2～5月
刺網：3～6月



地方名：ヒラメ

生態(1)

分布・回遊

本系群は、日本海以西の日本海中西部海域と福岡県から鹿児島県の九州西岸海域に分布する。幼魚は5月頃に内湾及び河口域の水深10m以浅の細砂底に多く分布する。2～3ヶ月を浅海域の育成場で過ごし、成長とともに深い海域へ移動、分散していく。

産卵期・産卵場

産卵期は南ほど早く、鹿児島沿岸では1～3月、長崎から熊本沿岸では2～3月、北九州沿岸では2～4月、鳥取沿岸では3～4月とされている。

成長・成熟

寿命は約12年とされ、ふ化後1年で全長25～30cm、2年で36～46cm、3年で44～58cm、5年で49～73cm程度となる。雄は雌よりも成長が遅く、極限体長も小さい。体重に関しては、1歳までは雌雄間で差は見られないが、満2歳を超えると雌は雄より成長が良い傾向がある。

資源動向(国による資源評価)(1)

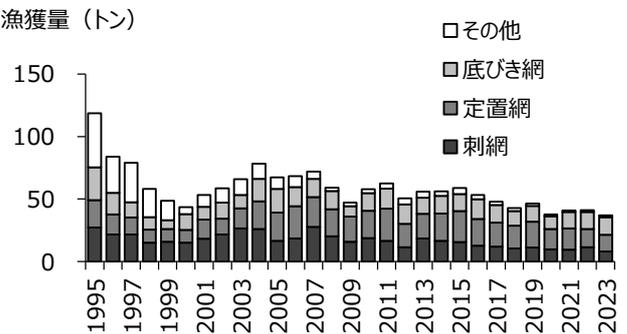
本系群の資源量は、1998年から2002年に一度減少したものの、その後回復した。2013年以降は再び減少傾向となり、2022年の資源量は3,446トンと推定された。最大持続生産量(MSY)の代替値は1,091トンで、これを実現する親魚量は4,053トンと算出された。2022年の親魚量はMSY(代替値)を実現する水準を下回り、2022年の漁獲圧はMSY(代替値)を実現する水準を上回った。

県内動向

漁獲動向

主に定置網、底びき網、刺網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年から2000年にかけて減少し、その後は概ね横ばいに推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は37トンで前年並みであった。

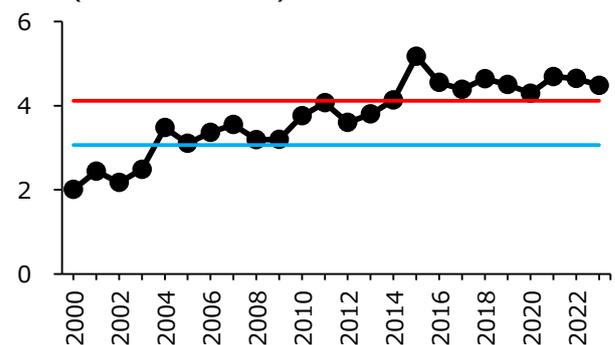
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の定置網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は2000年から2015年まで増加傾向にあり、2016年に減少して以降はほぼ横ばいで推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



31. ブリ

主な漁法と漁期

定置網：5～6月，11～3月
まき網：8～11月



地方名：ブリ，ガンド，フクラギ，コゾクラ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

沿岸性の回遊魚であり、未成魚から成魚は東シナ海から北海道までの日本列島の沿岸に広く分布する。稚魚（モジャコ）は孵化後、流れ藻について成長しながら日本海と太平洋を北上する。成魚は産卵のため、冬から春に南下回遊を行い、産卵を終えると、夏から秋に北上回遊する。

産卵期・産卵場

産卵期は、日本海側では1～7月頃、太平洋側では1～5月頃とされる。産卵場は、東シナ海の陸棚縁辺部を中心として九州沿岸から日本海側では能登半島以西、太平洋側では伊豆諸島以西である。

成長・成熟

満2歳前後から生殖腺が急速に発達することが報告されている。また、アーカイバルタグによる調査から、日本海から東シナ海へ大規模な産卵回遊を行うのは3歳の一部と4歳以上の個体と考えられている。これらのことから、資源評価においては、年齢別成熟率は、0～1歳で0%、2歳で50%、3歳以上で100%としている。

	尾叉長 (cm)	体重 (g)
1歳	37	0.88
2歳	53	2.46
3歳	67	4.62
4歳	78	7.12

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

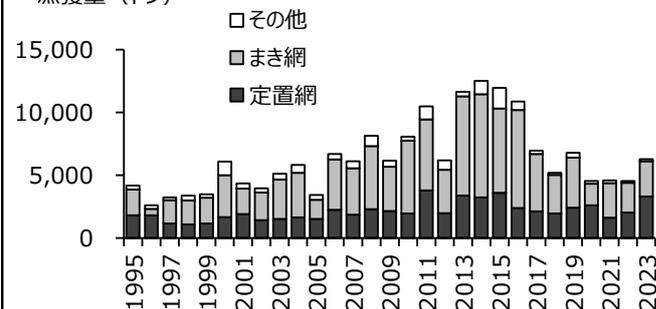
資源量は、2006年以降、増加していたが、2017年をピークに減少している。最大持続生産量（MSY）は13.0万トンで、これを実現する親魚量は22.2万トンと算定された。2022年は親魚量はMSYを実現する水準を下回り、漁獲圧はMSYを実現する水準を上回った。

県内動向

漁獲動向

主に定置網およびまき網で漁獲されている。定置網では北上回遊中の5～6月と南下回遊中の11～3月に多く漁獲され、特に11～3月に漁獲される大型個体は「寒ブリ」と呼ばれ高値で取引される。県内主要港における漁獲量は、2000年ごろから上昇傾向が続いていたが、2014年をピークに減少し、2020年以降は横ばいとなっている。県内主要港における2023年の漁獲量は6,271トンで前年を上回った。

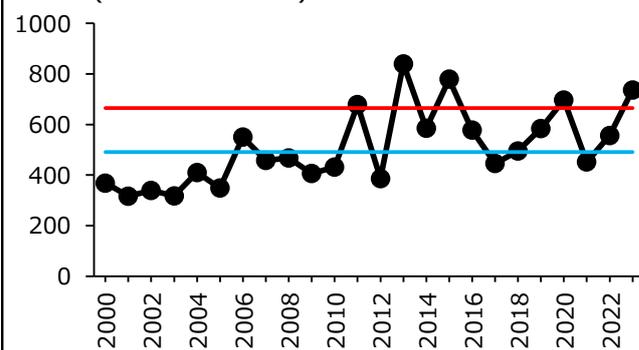
漁獲量 (トン)



来遊動向

県内の定置網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2000年代半ばから上昇傾向にあったが、2013年をピークに以後減少または横ばいとなっている。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



トピック

県内では体重を基準に軽い方から順に「コゾクラ」（0.5kg未満）、「フクラギ」（0.5kg以上、2kg未満）、「ガンド」（2kg以上、4kg未満）、「ブリ」（4kg以上）の4銘柄に分けられる。

32. ベニズワイガニ

日本海系群

主な漁法と漁期

カニカゴ：3～6月



生態⁽¹⁾

分布・回遊

北海道から島根県沖にかけての日本海、オホーツク海、ならびに銚子以北の本州太平洋沿岸の深海に生息し、日本海では水深1000～2000mを中心に水深400～2700mに広く分布する。浮遊幼生期を経て、甲幅3～4mmの稚ガニに変態し着底生活に入る。着底後の移動は、成体ガニの場合で50～60km程度であり、大半は10km以内に留まる。

産卵期・産卵場

成熟脱皮後に卵巣の発達が始まって初めての産卵が行われ、初産、経産個体ともに主産卵期は2～4月である。隔年産卵を行い、抱卵期間は約2年である。成熟に達するサイズは生息環境によって異なる。産卵場は不明である。

成長・成熟

年齢形質が明らかとなっていないため、天然下の個体の絶対年齢は不明である。飼育条件下では、雄が漁獲対象（甲幅90mm）に達するまで9.1年以上、雌が成熟するまでに7～8年を要する。3～8齢では、齢期ごとに季節的な脱皮盛期が認められる。雄は甲幅59～125mmで成熟脱皮（最終脱皮）し、以降は脱皮しない。飼育下において、成熟脱皮後4～5年で約7割の個体が死亡したことから、雄の寿命は少なくとも10年以上であると考えられる。

資源動向(国による資源評価)

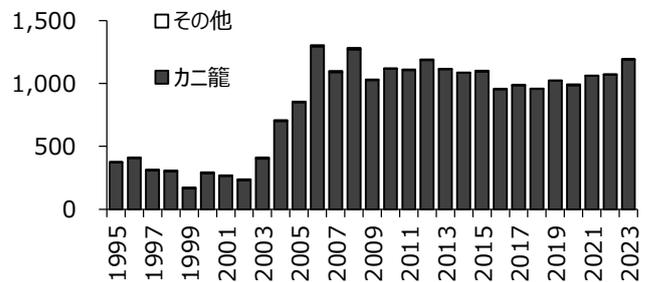
資源量水準は、日本海ベニズワイガニ漁獲成績報告書に記載されているかご数の集計値から求めた、単位努力量当たり漁獲量（CPUE）を標準化して得られた年トレンドを資源量指標値として推定した。本系群は2つの海域（大臣許可水域・知事許可水域）を別に評価しており、2022年の資源量指標値は、50.6%水準（大臣許可水域）と87.8%水準（知事許可水域）であった。そのため大臣許可水域では漁獲量を減少させ、知事許可水域では漁獲量を増加させる必要がある。

県内動向

漁獲動向

主にカニカゴで漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、2003年ごろから増加傾向が続き、2006年をピークに、それ以降は概ね横ばいで推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は1,192トンで前年並みであった。

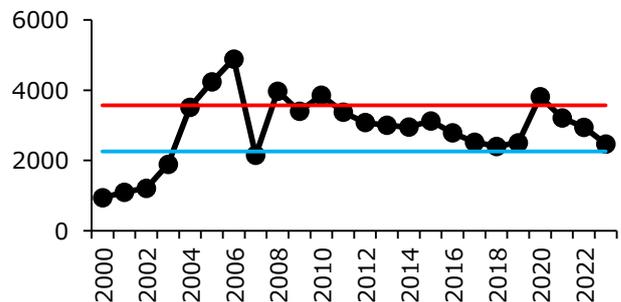
漁獲量（トン）



来遊動向

県内のカニカゴのCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2000年以降上昇傾向にあったが、2006年をピークに以後減少または横ばいとなっている。2000年以降のCPUEの動向によると、現在の来遊水準は中位である。

CPUE（キロ/隻・日）



トピック

県内では夏のプライドフィッシュとなっている。石川県の沖合では、ズワイガニと一部生息域が接する漁場があるため、ベニズワイガニとズワイガニとの交雑種が発現することがあり、「黄金ガニ」と呼ばれている。

33.ホッコクアカエビ

日本海系群

主な漁法と漁期

底びき網：5～6月，9～10月



地方名：アマエビ

生態(1)

分布・回遊

日本海の本種は鳥取県から北海道沿岸における水深200～950mの深海底に生息し、特に水深200～550mに多く分布する。孵出した稚エビはおよそ1ヶ月の浮遊幼生期を経験したのち着底し、成長に伴って水深400～600mへ移動する。その後、雌は抱卵すると次第に浅場へと移動し、水深250～300mで幼生を孵出させたのち、再度、水深400～600mへと移動すると考えられている。

産卵期・産卵場

日本海における本種の産卵期は2～4月であり、盛期は3月である。抱卵期間は11ヶ月で、隔年産卵を行う。本県沿岸でも産卵を行っている。

成長・成熟

寿命は約11年と推定され、各年齢における頭胸甲長は下表のとおりである。また、本種は雄先成熟の雌雄同体であり、雄としての成熟は3歳、雌としての成熟は6歳とされるが、性転換および成熟の年齢に関しては議論がある。

	頭胸甲長(mm)
1歳	8.8
2歳	15.0
3歳	19.1
4歳	21.9
5歳	24.5
6歳	26.7
7歳	27.7

資源動向(国による資源評価)(1)

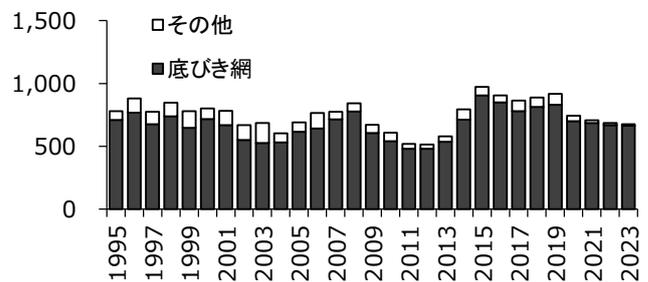
沖底の標準化CPUEを資源量指標値とし、指標値から資源水準は高位、指標値の直近5年間の推移から動向は増加と判断された。

県内動向

漁獲動向

主に底びき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、概ね横ばいに推移していたが、2009年から2012年にかけて減少した後、2015年まで増加し、それ以降、高い水準で横ばいに推移したが、2020年以降、減少傾向となっている。本県主要港における2023年の漁獲量は676トンで前年並みであった。

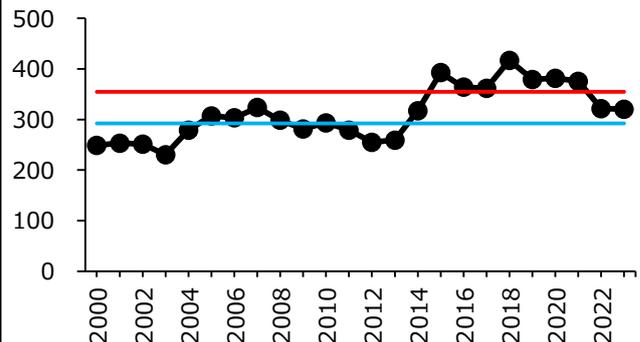
漁獲量(トン)



来遊動向

県内主要港の底びき網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は2000年から2013年まで概ね横ばいに推移していたが、2014年から2015年にかけて増加した。2015年以降は概ね横ばいに推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は中位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



34. マアジ

対馬暖流系群

主な漁法と漁期

定置網：5～7月
まき網：3, 11月



地方名：アジ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

マアジは日本の重要な水産資源であり、東シナ海から日本海、太平洋の沿岸域に分布し、対馬暖流系群と太平洋系群にわけて資源評価されている。ここでは対馬暖流系群について記載する。本系群は春夏に索餌のため北上回遊を、秋冬に越冬・産卵のため南下回遊し、東シナ海でふ化した仔稚魚は成長しながら対馬暖流の流れにのり、日本海周辺海域へと運ばれる。

産卵期・産卵場

産卵は、東シナ海南部、九州・山陰沿岸から日本海北部沿岸の広い海域で行われる。東シナ海南部では2～3月に仔稚魚の濃密な分布がみられる。産卵期は南部ほど早く（1～3月）、北部は遅い（5～6月）傾向があり、盛期は3～5月である。1歳魚で50%程度、2歳魚でほぼ全ての個体が成熟する。

成長・成熟

成長は海域や年代等によってやや異なる。

年齢	尾叉長 (cm)
1歳	16～18
2歳	22～24
3歳	26～28

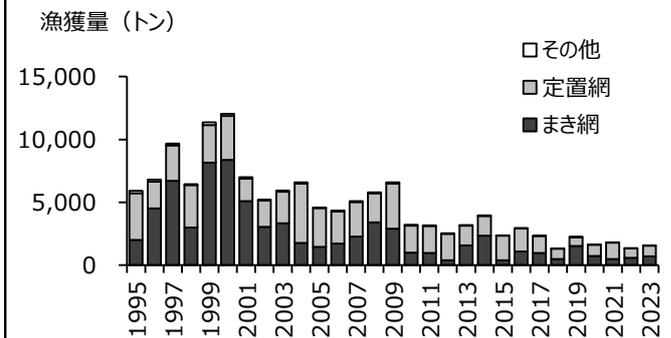
資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

本系群の資源量は1970年台後半に低水準だったが、1993～1998年には50万トンを超えた。その後1999～2002年には30万～40万トンに減少したが、2003、2004年には増加し50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移し、2022年は46.1万トンであった。最大持続生産量（MSY）は15.8万トンで、これを実現する親魚量は25.4万トンと算定された。漁獲圧は2016年以降、MSYを実現する漁獲圧を下回った。2020～2022年の親魚量はMSYを実現する親魚量を上回った。

県内動向

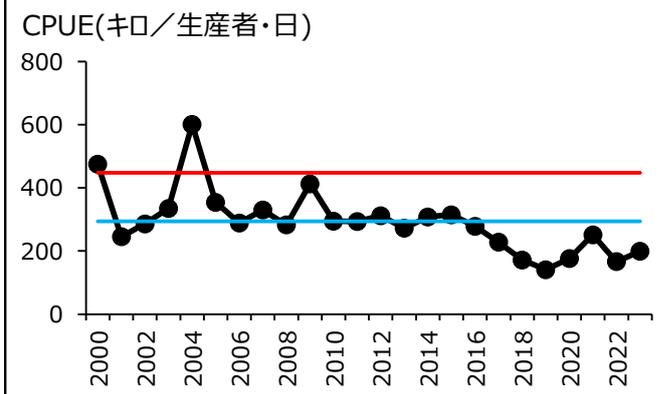
漁獲動向

主に定置網とまき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、2000年まで増加傾向であったが、2001年に急減して以降は、横ばいまたは減少傾向となっている。県内主要港における2023年の漁獲量は1,554トンで前年を上回った。



来遊動向

県内の定置網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2004年が最も高く、2015年～2019年に減少し、近年は概ね横ばいで推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。



35. マイワシ

対馬暖流系群

主な漁法と漁期

まき網：6～10月
定置網：5～8月



生態⁽¹⁾

分布・回遊

本系群は東シナ海から日本海にかけて広く分布する。資源量の多かった1980年代は沖合にも分布したが、資源量の少ない2000年以降の分布は主に沿岸域に限られている。本系群の回遊に関する科学的知見は不足している。

産卵期・産卵場

日本のマイワシの成熟開始年齢は資源量によって変動する。資源高水準期の産卵主体は2歳以上だが、資源減少期には満1歳魚で成熟が見られ、低水準期には多くの満1歳魚が成熟していた。また、成熟開始年齢は個体の栄養状態や水温等の環境要因の影響も受ける。産卵期は冬から春（1～6月）で、低緯度海域ほど早く産卵し、産卵場は能登半島から九州西岸にかけての沿岸域とされている。

成長・成熟

マイワシの成長速度は水温や餌料などの環境要因、年齢等の内的要因の影響を受け、高齢ほど成長が遅くなる。また、成長は資源増加期に速く、資源高水準期に遅くなる、資源水準と同調した変動を示す。

年齢	体長(cm)
1歳	16
2歳	19
3歳	20

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

本系群の資源量は1970年代から増加し、1988年には1千万トンに達した。しかし、1990年代に急減し、2001～2003年には過去最低水準の5千トン前後になった。2004年以降に増加し、2021年には54.1万トンと推定された。親魚量は2021年には27.4万トンと推定された。

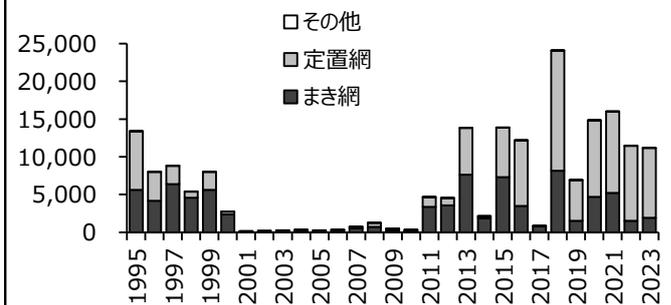
2021年の親魚量は、最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（109.3万トン）を下回る。また本系群の2021年の漁獲圧はMSYを実現する水準の漁獲圧（Fmsy）を下回る。親魚量の動向は近年5年間（2017～2021年）の推移から「増加」と判断される。2023年のABCは14.3万トンと算出された。

県内動向

漁獲動向

主に定置網とまき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、2001年まで減少し、その後は非常に低調だったが、2011年以降は年によって増減が激しいながら、まとまった漁獲が続いている。県内主要港における2023年の漁獲量は11,183トンで前年を下回った。

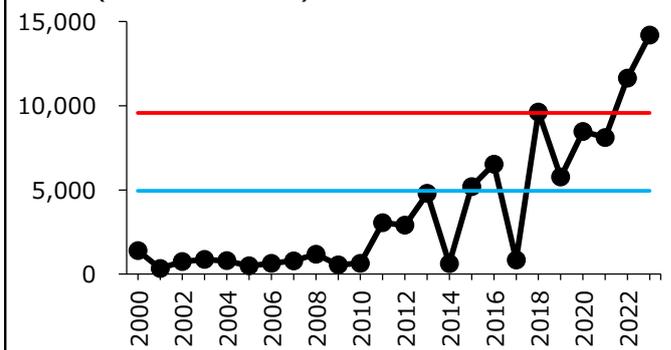
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の定置網のCPUE（1生産者×1日当たりの漁獲量）は、2011年以降増加傾向であり、2022年は7,874kg・隻・日となった。一方、2014年、2017年ならびに2019年には大きく減少した。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は高位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



36. マガレイ

日本海系群

主な漁法と漁期

底びき網：5～6月，9～10月



地方名：クチボソ，クチガレイ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

本種は対馬海峡から間宮海峡北部までの日本海沿岸各地、北海道、南千島、サハリン海域、本州の太平洋側から九州まで広く分布する。本系群の主分布域は新潟県から青森県で、主に水深200m以浅、水温5～12度の砂質、砂泥質の海底に生息する。成長及び季節によって深淺移動を行う。

産卵期・産卵場

本種の産卵期は、青森県沖日本海では2～4月、新潟県沿岸では2～5月（盛期は3～4月）とされている。新潟県沿岸における産卵場は水深50～90m付近で、分離浮遊卵を産出する。

成長・成熟

年齢と体長の関係は、新潟県北部海域と青森県沖日本海で異なった報告がされており、海域間の成長差が大きい。雌雄ともに青森県沖日本海での成長が速く、極限体長も大きい。雌は3歳で約70%、4歳ですべての個体が成熟し、雄は2歳から3歳で成熟する。成熟個体の体長は、雄で14cm以上、雌で16cm以上であり、寿命は雌で10歳、雄で7歳とされている。

資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

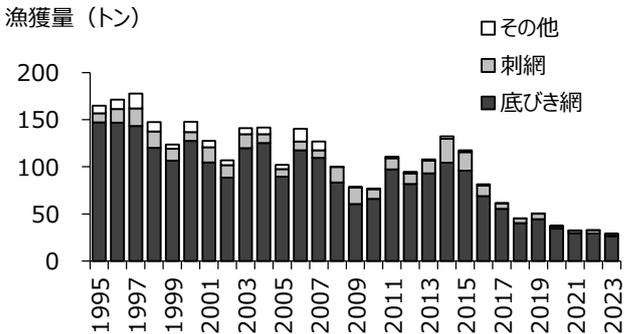
新潟県北部海域と青森県日本海沿岸を対象に算出された年齢別漁獲尾数を用いたコホート解析により資源量は推定されているが、使用できるデータが限られていることから、不確実性を多く含む結果となっている。資源量は、2006年が最も多く、2010年にも前後の年と比べてやや高いピークがみられたが、それ以降は減少し続けている。資源水準は、1971～2020年の漁獲量の最大値に近い1200トン进行三等分し、800トンおよび400トンをそれぞれ高位と中位、中位と低位の境界線とした。2022年の漁獲量は60トンであったことから、水準は低位と判断された。

県内動向

漁獲動向

主に底びき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1998年から増減しつつも減少傾向が続き、2011年以降、増加傾向となったが、2015年から再び減少傾向となっている。県内主要港における2023年の漁獲量は29トンで過去最少であった。

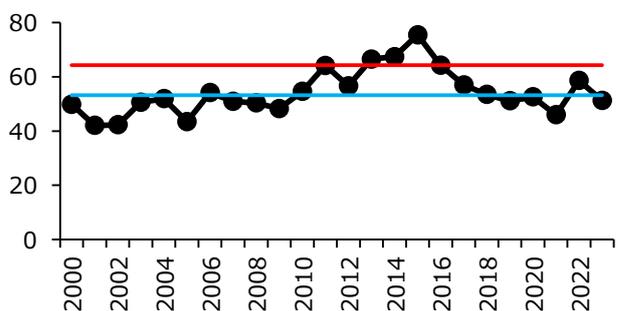
漁獲量(トン)



来遊動向

県内の底曳網のCPUE（1隻×1日当たりの漁獲量）は、2000年代初めから上昇傾向にあったが、2015年をピークに、以後減少傾向となっている。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。

CPUE(キロ/隻・日)



トピック

石川県で漁獲されるカレイ類は多種にわたり、それぞれに特有の呼び方がされています。マガレイ：「クチボソ」、ムシガレイ：「スガレイ」、ヤナギムシガレイ：「ささがれい」、ソウハチ：「あわて」、ヒレグロ：「なめたがれい」

37. マダイ

日本海系群

主な漁法と漁期

定置網・刺網：5月
底びき網：9～10月



生態⁽¹⁾

分布・回遊

本系群は、青森県太平洋側から津軽海峡を経て日本海の兵庫県沖にいたる水深200m以浅の沿岸域に広く分布する。0歳魚は水深10～20m域に着底し、成長に伴い分布水深は徐々に深くなる。春期は産卵のために浅海域に移動するほか、季節的な南北回遊も行う。

産卵期・産卵場

本種の産卵期は、5～7月の春期で、水深20～100mの浅海域にて産卵する。

成長・成熟

尾又長は1歳で12cm、2歳で19cm、4歳で29cmに成長し、6歳で38cm程度となって、体重1kgを上回る。寿命は10年以上であると考えられる。成熟開始年齢および最小成熟尾又長は雌雄ともに3歳、30cm前後であり、4歳以上でほとんどの個体が成熟する。

	尾又長 (cm)
1歳	12
2歳	19
4歳	29
6歳	38

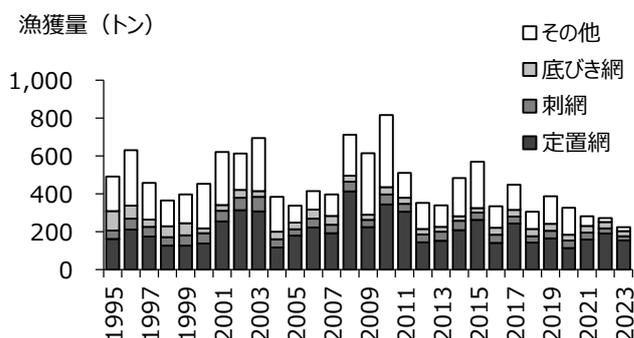
資源動向(国による資源評価)⁽¹⁾

漁業種類別で最も漁獲量が多く、漁業形態や漁獲努力量に大きな変動が見られない大型定置網の漁獲量から資源水準を判断し、同漁業における漁労体あたりマダイ漁獲量(トン/統)を資源量指標値として用いている。資源水準は、1986年以降のマダイ漁獲量の最小と最大の間を三等分し、968トンおよび614トンをそれぞれ高位と中位、中位と低位の境界線とした。2022年の漁獲量は665トンであり、直近5年(2018～2022年)の推移から、資源水準は中位、動向は横ばいと判断される。

県内動向

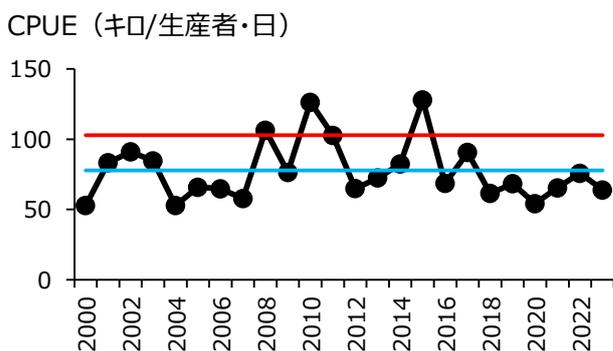
漁獲動向

主に定置網、刺網、底びき網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、300～800トン程度で増減を繰り返している。県内主要港における2023年の漁獲量は225トンで前年並みであった。



来遊動向

県内の定置網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2010年と2015年に高めであったものの、2000年から2023年に至るまで概ね横ばいである。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。



トピック

石川県の春のプライドフィッシュに認定されている。春に産卵を控え脂がのり、体が薄いピンク色をしているマダイを「桜鯛」、産卵を終えた夏のマダイを「麦藁鯛」と呼んでいる。

38. マダコ

主な漁法と漁期

タコ壺・カゴ：5～8月



地方名：アカダコ，タコ

生態(1)

分布・回遊

太平洋、大西洋沿岸など世界の暖・温帯海域に広く分布する。日本周辺では日本海側は北海道以南から、太平洋側は福島県以南から東シナ海にかけて各地沿岸に分布し、砂礫底や岩礁域に生息する。

産卵期・産卵場

産卵期は春から秋で、産卵水温は15℃以上とされている。産卵盛期は、鹿島灘から房総沖では3～6月と9～10月、瀬戸内海では4～5月と9～11月、周防灘では5～6月と9～10月とされる。産卵場は水深20m前後の海底とされる。

成長・成熟

全長60cm前後に達する。孵化後、80日で全長12cm前後に成長し、全長10～13cmに達するまで浮遊生活をするが、その後、底生生活に移行する。1歳で全長60cm前後に成長し、成熟する。寿命は1～2年とされる。雌の産卵は一生に1回で、産卵から稚仔が孵化するまで卵の世話をし、その後、へい死するとされる。

資源動向(国による資源評価)

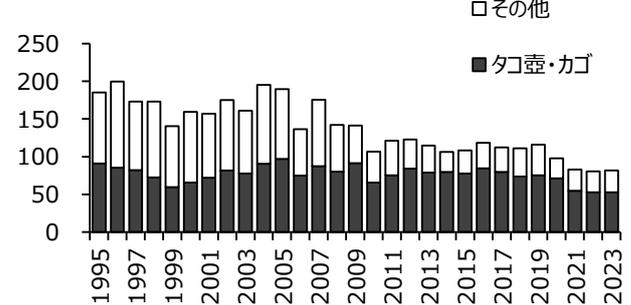
水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

漁獲動向

主に内浦海域でタコ壺とカゴによって漁獲されている。周年漁獲されるが、特に夏季に多く漁獲される。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、概ね横ばいに推移していたが、2010年にやや落ち込み、その後は横ばいで推移している。県内主要港における2023年の漁獲量は82トンで前年並みであった。

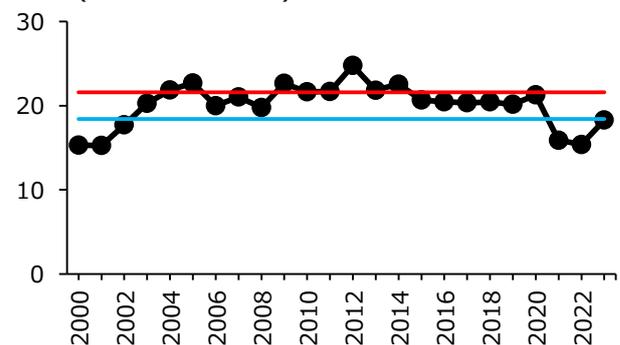
漁獲量(トン)



来遊動向

七尾魚市場のタコ壺・カゴのCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2001～2005年に上昇傾向で、その後、横ばいで推移していたが、2021年に減少した。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



39. マダラ

本州日本海北部系群

主な漁法と漁期

底びき網：9～6月
はえ縄：11～1月
刺網：11～2月



生態(1)

分布・回遊

本種は北太平洋の沿岸域に広く生息し、本系群は日本海北部の大陸斜面（水深200～400m）に分布する。冬季には産卵のため浅海に移動する。定着性が高いとされるが、大規模な回遊を行うとする知見もある。

産卵期・産卵場

産卵期は1～3月である。産卵場は本来の生息水深より浅く、底質が泥、砂泥、砂礫および礫の海域と考えられる。

成長・成熟

成長が早く最高年齢とされる8歳で体長90cm、体重10kgに達する。日本海では、雄で体長40cm以上、雌で体長50cm以上で成熟し、成熟年齢は3～4歳と考えられる。資源評価においては、年齢別成熟率は0～2歳で0%、3歳で50%、4歳以上で100%とされる。

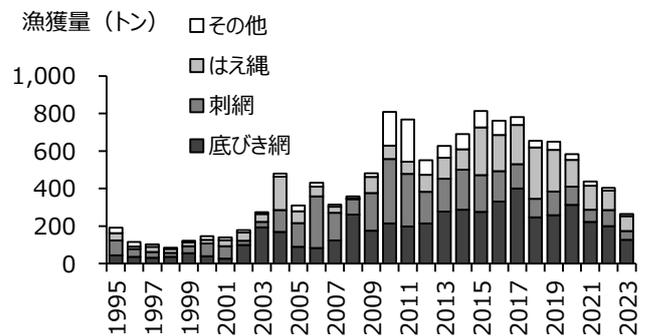
資源動向(国による資源評価)(1)

資源量は、2000年代前半に急増して、2005年に過去最高となった後、2016年にかけて緩やかに減少した。2017年以降は増減を繰り返しつつやや減少傾向で推移している。最大持続生産量(MSY)は2.9千トンで、これを実現する親魚量は5.2千トンと算定された。2022年は、親魚量はMSYを実現する水準を上回り、漁獲圧はMSYを実現する水準を下回った。

県内動向

漁獲動向

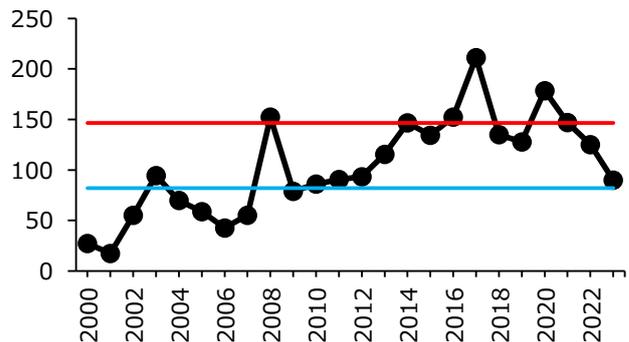
主に底びき網、刺網、延縄で漁獲されている。底びき網は禁漁期を除いてほぼ周年漁獲しているが、刺網、延縄は産卵期の個体を狙って冬季に漁獲している。県内主要港における漁獲量は、1999年以降、増加傾向だったが、2015～2017年をピークに、2018年以降、減少している。県内主要港における2023年の漁獲量は265トンで前年を下回った。



来遊動向

県漁協輪島支所の底びき網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2000年代前半から増加傾向だったが、2010年代半ばをピークに横ばいとなり、近年は減少傾向となっている。1995年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は中位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



40. マナマコ

主な漁法と漁期

底びき網：12～4月



地方名：ナマコ，アカナマコ

生態(1)

分布・回遊

千島列島、サハリンから九州南端までの日本沿岸に分布する。水深40cm以浅の外洋の岩礁や転石帯、内湾の砂泥底に生息する。

産卵期・産卵場

産卵期は春から夏で、産卵盛期は福井県では5～6月とされる。

成長・成熟

卵から孵化すると浮遊幼生となり、成長するにつれて次第に海底近くの底層に分布し、底生生活に移行する。受精から稚ナマコになるまでの期間は約3週間である。

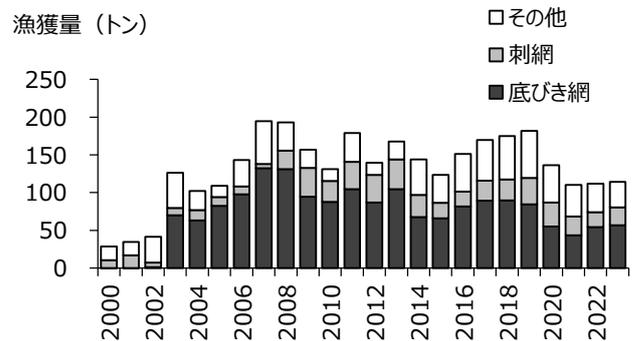
資源動向(国による資源評価)

水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

漁獲動向

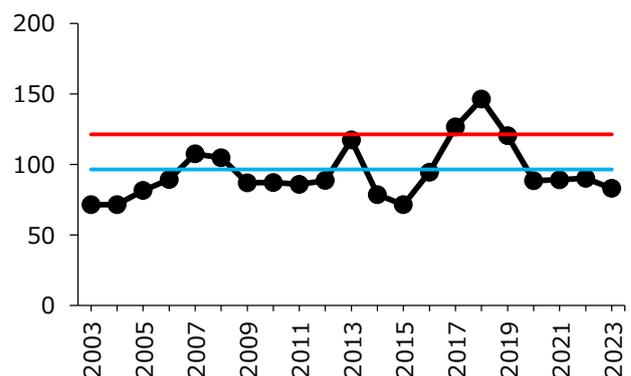
主に底びき網、特に七尾湾での桁網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、2003年以降、2007年まで増加傾向で、その後は増減を繰り返しつつ横ばい、2019年以降は減少傾向となっている。県内主要港における2023年の漁獲量は114トンで前年並みであった。



来遊動向

県漁協七尾支所の底びき網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2003年以降、2013年までは横ばいまたは微増だったが、その後、2015年まで減少した後、2018年まで増加、2020年まで減少し、近年は横ばいとなっている。2003年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



トピック

体色が赤、青、黒に分かれ、それぞれ「アカナマコ」「アオナマコ」「クロナマコ」と呼ばれる。

41. マフグ

日本海域

主な漁法と漁期

底びき網：3～5月
定置網：4～6月



生態⁽¹⁾

分布・回遊

日本近海では、オホーツク海南西部、北海道～九州南岸の太平洋沿岸、瀬戸内海、北海道～九州南岸の日本海・東シナ海、日本海中央部、東シナ海の水深1～210mに分布する。本種は山口県日本海沖からあまり移動しない群と対馬海峡から北海道沿岸までの日本海を大きく移動する群に大別され、両群とも移動しながら越冬・産卵・索餌回遊すると考えられている。

産卵期・産卵場

産卵期は、北海道初山別沿岸で6月中旬～7月上旬、隠岐諸島沿岸で4月下旬～5月、山口県千里ヶ瀬沖では1～4月と推測される。

成長・成熟

本州沿岸における本種の年齢・成長に関する知見は得られていない。最小成熟全長は、山口県千里ヶ瀬周辺海域では、雄が全長210mm、雌が全長260mmと報告されている。

資源動向(国による資源評価)

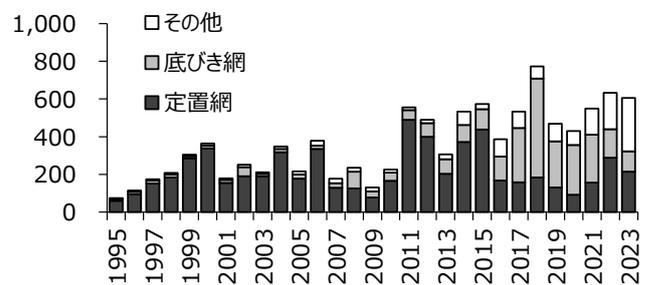
日本海(本州沿岸)で漁獲される本種の資源動向や資源水準を判断するための資源量指標は現時点では得られていない。

県内動向

漁獲動向

本県では、コモンフグ、シマフグ等とともにフグ類として漁獲量が集計され、主に定置網、底びき網で漁獲されている。県内主要港におけるフグ類の漁獲量は、1995年から2000年にかけて増加し、その後2010年まで低水準となったものの、2011年に急増して以降は高い水準で増減を繰り返している。県内主要港における2023年の漁獲量は606トンで前年並みであった。

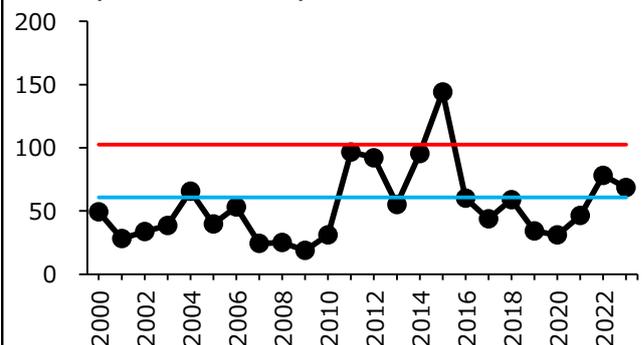
漁獲量(トン)



来遊動向

県内主要港における定置網のCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は2000年から2010年まで概ね横ばいに推移していたが、2011年から2015年にかけて増加傾向だったが、その後、減少した。2020年以降は再び増加傾向となったが、2023年は前年の値をわずかに下回った。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は中位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



42.メバル

主な漁法と漁期

定置網：1～5月
刺網：2～6月



地方名：ハチメ、チカバチメ

生態 (1) (2)

分布・回遊

北海道中部から朝鮮半島南部に分布する。沿岸の岩礁域や藻場に生息し、上層や中層に浮いていることが多い。稚魚期に流れ藻に付随して移動回遊することが知られており、日本海側では着底までかなりの距離を北上移動すると考えられている。

産卵期・産卵場

卵胎生で秋から初冬に交尾し、仔魚が親魚の体内から生み出される産出期は、岩手県で12～3月、関東で2～4月、山口県で12～1月とされる。

成長・成熟

1歳で体長10cm前後、2歳で13cm前後、3歳で15cm前後、5歳で20cm前後に成長し、体長30cmに達するとされる。2～3歳で成熟するとされる。

資源動向 (国による資源評価)

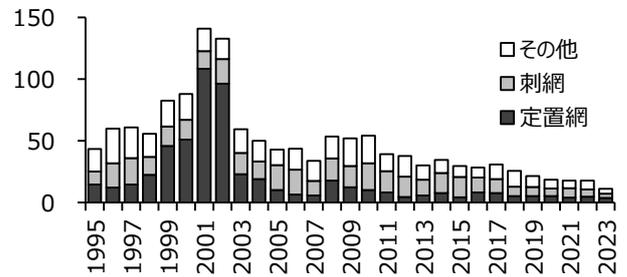
水産研究・教育機構による資源評価は行われていない。

県内動向

漁獲動向

メバルは2008年にシロメバル、アカメバル、クロメバルの3種に分類されたが (Kai and Nakabo 2008)、本県では区別されていない。主に定置網、刺し網で漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年から2002年にかけて増加したが、2003年に急減した。その後は増減しつつも緩やかな減少傾向が続いている。県内主要港における2023年の漁獲量は11トンで過去最少であった。

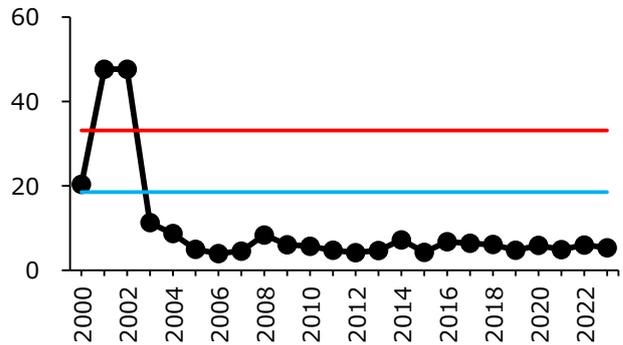
漁獲量 (トン)



来遊動向

県内の定置網のCPUE (1生産者×1日当たりの漁獲量) は、2001年および2002年に高い値となったが、2003年に急減。その後は概ね横ばいに推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。

CPUE (キロ/生産者・日)



出典：(1) Kai Y., and T. Nakabo (2008) Taxonomic review of the *Sebastes inermis* species complex (Scorpaeniformes: Scorpaenidae). *Ichthyological Research*, 55, 238-259.

(2) 令和2 (2022) 年度ウスマバル日本海北・中部系群の資源評価 国立研究開発法人水産研究・教育機構

43.モロトゲアカエビ

日本海北中部海域

主な漁法と漁期

エビカゴ：4月，7～8月



地方名：シマエビ

生態⁽¹⁾

分布・回遊

本州日本海沿岸、サハリン・韓国東岸の水深180～530mの泥・砂泥・砂底に生息する。

産卵期

卵巣重量の季節変化およびふ化期の発眼卵を有する個体の出現率の季節変化から、産卵期は11月～翌年4月とされ、抱卵期間はほぼ12ヶ月と推定される。

成長・成熟

ふ化後満1年で頭胸甲長17mm前後、2年後には22mm前後、3年目には27mm前後、4年後には31mm前後に達する。また、3歳の後期から4歳に至る時期に雄から雌に性転換すると推察される。

資源動向(国による資源評価)

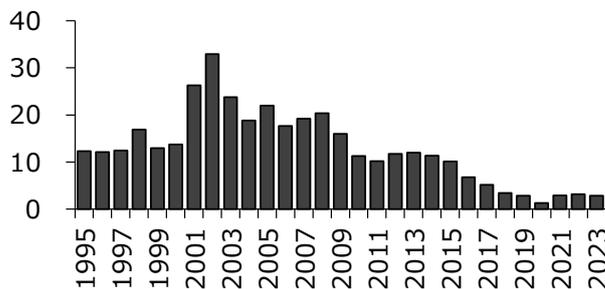
日本海北中部における資源量指標値は得られていない。

県内動向

漁獲動向

主にエビカゴで漁獲されている。県内主要港における漁獲量は、1995年以降、2000年までは概ね横ばいに推移し、その後2002年にかけて急増して以降は減少傾向となっている。県内主要港における2023年の漁獲量は2.9トンで前年並みであった。

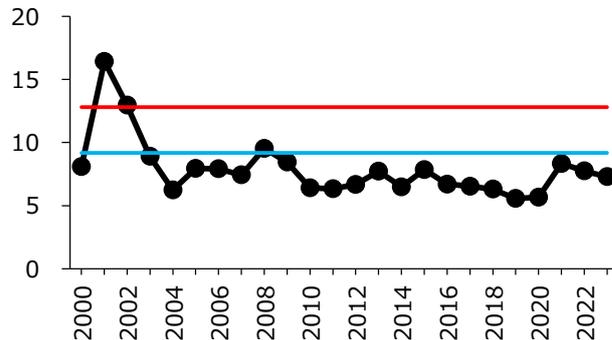
漁獲量(トン)



来遊動向

県内主要港におけるエビカゴのCPUE(1生産者×1日当たりの漁獲量)は、2001年に急増したが2004年にかけて減少した。以降は低水準でほぼ横ばいに推移している。2000年以降のCPUEの動向によると、2023年の来遊水準は低位である。

CPUE(キロ/生産者・日)



出典：(1) 令和4(2022)年度資源評価調査報告書，2023，国立研究開発法人水産研究・教育機構